

七ヶ浜町文化財調査報告書第2集

史跡「だい き がとい大木囲貝塚」環境整備調査報告書 II

昭和49年3月

七ヶ浜町教育委員会

正誤表

ページ	見出し或は段落	行	誤	正
4		上から10	田沢金吾	田澤金吾
5		〃 18	信仰の場	信仰の場
		〃 7	第8図	第9図
14		〃 10	第8図	第9図
		〃 15	人為島	人為島
15		〃 4.9	<i>hodophylax</i> <i>hodophylax</i> <i>hodophilax</i>	
		下から10	強腰	強腰
16		上から1	授取	採取
17	棲息場所欄	4,8,13,15,16	岩塚	岩庭
	分布欄	3	房総以内	房総以南
18		14	i) ミズワニ属	i) を削除
		18	DF80L I出土	削除
19	メバル	15	前上顎骨2は	前上顎骨2は
20	クロマグロ	下から5	現在マグロ科	現生マグロ科
21		上から14	小高文夫	小高良夫
22		1	あげられる。	あげられている。
23	尤表のはばの欄中	5	8.3	7.3
24	本文の6行!!	6	L/W×100の率	L/W×100の率が
25	引用文献	下から2	小池裕子	KOIKE Hiroko
		7	PL. XI	PL. X ²
		8	Rep	Rep.
30		下から12	竹内勝郎	竹丸勝郎
		〃 6	4月	5月
			Bib	Bib ⁻
34	7. イボニシ		【写真を裏返しに引伸ばしてしまった】	【腹口が右にくる】
折込図	図11		AP62	F A62

序

史跡大木囲貝塚は、日本有数の大貝塚であって、大正中期より昭和の初期多くの知名の考古学者、人類学者によって発掘調査され、その出土品には、石器、土器、骨角器、獸骨、魚骨、鳥骨、人骨等あり、考古学的研究資料が豊富に埋蔵されており、貴重な貝塚であると、にわかに有名となった。

しかるに、当貝塚は、眺望よく、住宅地として最適地であるため、近年貝塚の一部が宅地造成され、破壊されようとしたので、急遽その保護のため、昭和43年3月18日国指定となった。直ちに昭和43年度より、用地の買上げを開始し、昭和49年度で完了する予定である。

用地買上げ後、指定区域の耕作は全く行われず、全域に雑草・雜木が繁茂密生し、史跡として見るかけもない状態となつたので、この貴重な埋蔵文化財を保護、活用をはかるため、史跡公園として環境整備を行なうこととなり、国庫補助、県費補助をうけ、昭和47年度より、6ヶ年継続事業として、環境整備をはじめた。本年はその第二年度であり、覆屋建設の地区選定のため試掘調査を行なったほか、苑路の一部造成、貝層分布調査及び現生植物の調査を行なつた。その成果をまとめ、報告書第2集として発刊するものである。報告書の作成にあたり、予算の都合上、ページ数を制限せざるをえなかつた。執筆者のかたがたの努力に感謝いたします。

本報告書によって大木囲貝塚の価値を地域社会の人々に理解して戴き、更に研究者の方々の参考となれば幸甚である。

なお、この環境整備事業並びに報告作成に当つて、懇切に指導下さつた、文化庁の安原啓示氏、多賀城跡調査研究所長の岡田茂弘氏、東北大学名誉教授伊東信雄氏並びに環境整備指導委員会の委員の方々に深甚な感謝を捧げます。

昭和49年3月

七ヶ浜町教育委員会教育長 山家 正

目 次

序.....	山家 筝	
I. 試掘調査について.....	八巻 正文.....	1
II. 試掘により出土した遺構、遺物.....		4
A. 住居址と集落.....	八巻 正文.....	4
B. 人工遺物.....		5
1. 土器・陶磁器.....	八巻 正文.....	5
2. 石器・石製品.....	千葉 美代 ^{タツミ}	9
3. 骨角器.....	八巻 正文.....	14
C. 自然遺物.....	八巻 正文.....	15
1. 貝.....		15
2. 魚.....		18
3. 四肢動物.....		20
4. 鳥.....		25
5. 粪石.....		26
III. 分布調査.....	八巻 正文.....	27
あとがき.....		29
引用文献.....		29

I. 試掘調査について

A. 調査関係者

調査責任者 伊東信雄（東北大学名誉教授）

調査員 八巻正文（七ヶ浜町教育委員会嘱託）

参加学生 東北大学大学院博士課程一平口哲夫、小林博昭。東北大学大学院修士課程一岡村道雄、清水芳裕、千葉英一、今野裕明、黒川利司。東北大学研究生一井上真理子、戸田正勝。東北大学考古学科4年一飯島義雄。宮城教育大学一二浦好江、渡谷正三、鈴木まち子、斎藤智恵子、斎藤輝了。明治大学一阿刀田裕子、吉田まゆみ。東北学院大学一阿部正光、阿部輝了。宮城学院女子短期大学一滝川京子、高橋由美子。宮城県塩釜女子高等学校一和沢香代子。

人夫 佐藤勝江、佐藤京子、佐藤綱治、佐藤捨松、佐藤とみこ、佐藤とめよ、佐藤はるの、佐藤文子、佐藤ミノル、鈴木うん、鈴木けきの、鈴木しげこ、鈴木とめ、鈴木みつえ、我妻エイ子、渡辺むりよ。

協力 金子清昌（早稲田大学）、後藤勝彦（宮城県塩釜女子高等学校）、千葉宗久（飯野川第二小学校）、遊佐五郎（色麻小学校）、佐藤好一（高清水小学校）、丹治英一（磐梯青年の家）、安田尚憲（東北大学大学院博士課程学生）、外山凡平（教育映画株式会社）、福田友之（北海道教育庁）、佐藤武夫。

指導 芹沢長介（東北大学教授）



図1 大木団貝塚の位置

B. 大木団貝塚の位置（図1）

東経141° 2' 36"から3' 3"の間、北緯38° 17' 58"から18' 15"の間。

地籍は宮城県宮城郡七ヶ浜町大字東宮浜字東大木、西大木、北下方、南下方の四つの小字にまたがる。

5万分の1地形図「しおがま」NJ-54-15-15

C. 試掘の目標

大木団貝塚では、最も良い地区に覆屋をかけ、その中で発掘しているところを一般の見学者に見ていただく計画である。したがって貝層が厚く広く堆積していて、できれば住居址が近くにある地区をみつけねばならない。

D. 試掘地点の選定

大正時代以来の発掘の結果をしらべ、昭和47年度に福田友之によって行われた埋蔵貝塚分布

調査成果をもとに地点を検討し、伊東信雄、岡川茂弘に現場においていただき最終的に地点を選定した。伊東信雄によれば山内清男（1929, 5）の発掘地点A～EのうちB地点は図11に示した破線の円印の付近であるが他はよくわからないという。

E. 地区設定（図11参照）と層位

史跡全域を方眼に地区割した。海に向って舌状につき出ている丘の標高の高い線に縦軸を設け2地点に基準の石標を立てた。この縦軸を3m単位で区切り、南から北にアルファベットA～Tの記号をつける。これだけでは60mにしかならない。そこでさらにこの上の単位として60mごとにA, B, C……の記号をつけた。

縦軸に直交する横軸も3m単位で区切り、記号として数字を東から西に1～99を3mごとにつけた。しかしこれだけでは史跡全域をおおうことができない。そこで東部地域には最初にEを冠し、西部地域にはWを最初に冠することとした。

石標は北のものをFA70、南のものをCA70地点とした。例えば西部地域の地点、区はWF A00のように表わすことになる。

層位を表わす場合には各地区ごとに上から大きく1, 2, 3……層ととらえることとし、各層中にさらに細い層、ブロックがある場合にはアルファベットの小文字をつかった。したがって遺物の出土した地区、層はDF45L3bのようにあらわすことができる。

3×3mの小地区の巾をさらに区分する場合にはアルファベットの小文字をつかいその区の範囲を平面図に記録した。これはDF45bのように表わす。

F. 発掘方法

覆屋建設計画の構想から、良い貝層や住居址があらわれても掘上げないことにし、検土杖をつきさすこと等によって下の様子が判明すれば発掘を中止することとした。貝層が斜面の場合、上の地区的浅いところと下の地区的下層の貝層が山の斜面に直交してトレントを設けた。また以前に発掘した際に良い貝層が発見された地点を先生がたに教えていただきそこにトレントを設けた。以前掘ったところを掘れば簡単に地山までの土層を知ることができると、ほとんど掘られてしまったところに覆屋を建設してもむだなので過去における発掘地点の確認をしておく必要がある。

G. 調査経過

第1地点は貝層及び住居址をみつけるためにトレントが設けられた。試掘区は次の通り。DF45～50, 52～56, 58, 60, 62, 70～81, 83。DE53, 54。後藤勝彦の御教示によれば昭和38年東北大歴史学系研究室が発掘したA地点はDD49付近、B地点はDC52付近である。A地点出土の土器については小笠原好彦（1968）の論文がある。DF54地区で住居址の1部が表われたので発掘区を北に拡大した。それが第4地点である。

第2地点は昭和24年東北大学文学部伊東信雄によって発掘された地点である。伊東信雄によれば貝層は80cm程の厚さがあり、大木連貝塚の中では貝層が非常に良い地点であるが、それだけにこの付近は何回も発掘されているという。発掘の結果C F 43, 44地区で昭和24年の発掘区及びその他の発掘区があらわれた。図2参照。試掘区はC F 43, 44, 46区である。

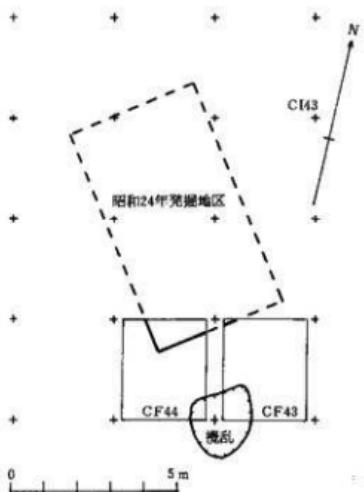


図2 C F 43, 44地区に昭和24年東北大学文学部伊東信雄による発掘地区があらわれた

C S 78, D F 48, D F 74, 75, 81~83, D K 46~48, F E 60~F I 60地区は混土貝層が1m以上である。

住居址については別に述べる。

なお試掘の結果何もなかった地区はD K 54, 55, F A 61, 62, F B 62地区であった。

I. 結論

複屋は100坪では小さい。また造構の保存管理はプレハブでは十分行えない。何もない地区に複屋の壁がくるようになるのがぞましい。発掘した貝層や住居址を保存する技術は未だ不十分であり、実験をしなければならない。

今後苑路造成などの工事にともない事前調査が行われるので、住居址やもっと良い貝層が発見されるだろうから、複屋建設は事前調査が十分なされた後で建設するのが良い。

(八巻正文)

II. 試掘により出土した遺構・遺物

A. 住居址と集落

今回の試掘では保存状態のよい住居址はみつからなかった。DF54, 55, DG53~56, DH54~56区にまたがって出土した遺構は住居址と思われるが柱穴がほぼ円形（径約8m）に出土したのみで壁穴の壁、床面、炉などは長い間の浸食や耕作により消失したらしい。柱穴（pit No. 16, 36, 40, 43）から出土した土器は大木8b, 9式が主で、人木10式を少量含む（図版I-B-1）。なお調査が既に入り霜柱が立ち風化が激しいため埋めもどしたのでくわしくは再度の調査に待たねばならない。（図11参照）

住居址の位置について、貝層の下にあるのではないかという意見が多かった。貝層の下から住居址が出土した例（菅原正明 1972, 田沢金吾 1940 参照）が多い。大木圓貝塚は大正時代から貝層が発掘されて来ているが未だ住居址が発見されていない。これは住居が台地の高い平らな地域につくられ、貝殻などは斜面に捨てられていたためであろう。大木圓貝塚でもA-12b貝層地域のように斜面がゆるやかで高い方にまで貝層が確認されているところでは、貝層下に住居址が発見されるかもしれない。

集落を発掘によって調査することは、大木圓貝塚のような広大な面積の遺跡では容易でないし、浸食、耕作、土木工事などによってすでに消滅した遺構も少なくないから、集落については想定によらざるをえない部分が大きい。

今、仮に貝層の地域を谷部とも関連させ6グループに分けてみる。

- A-1
- A-2, A-3
- A-4, A-5, A-6
- A-7
- A-8, A-9, A-10, A-11
- A-12a, A-12b

それぞれの谷部には現在も道があるが、人背にもあったにちがいない。また谷部には泉があったろう。現在わきだしている泉はDP15付近のみであるが、史跡内にはこの他にも水たまりがあちこちにみられる。人背、台地は森になっており、水量も豊富だったにちがいない。

貝層の6グループと地形からこの台地を6分すると図3のようになる。どの地区からも分布調査の結果人木1から10式までの土器が採集されている。大木1式期にこの台地に人々が移って来たとき6家族はそれぞれきめられた地区に住居を設け、ごみ捨て場や仕事場、汲揚場、炊

事場、貯蔵穴、墓などもそれぞれの地区の中に設けられたことであろう。基本的にはこれらの6家族が大木10式まで住んだのではないだろうか。

環状貝塚、或は馬蹄形貝塚の中央部を広場と考えるのが一般的である。しかし大木圓貝塚の場合、中央に広場があったろうか。今後の調査に待たねばならないが、台地は当時森になっていて、その中にある家々は冬の冷い風から守られたのではないだろうか。むしろ台地の東の浜辺が共有の場であり、他の聚落へ行くにもこの浜辺から舟ででていったのではないだろうか。

中央台地の東に舌状に伸びた小さな台地がある。この斜面にも、B-1, B-2, B-3などの小さな埋貝層が確かめられている。ある時期にこの小舌状台地に住居あるいは特殊な施設がたてられたかもしれない。ここは生業の中心である漁場にもっとも近く、よそから人木團の集落を訪れた人々もすぐ下の浜に舟をつけ上陸したにちがいない。あるいはこの舌状台地には集落の首長が住んだのかもしれない。或は共同の施設があったのかもしれない。

繩文時代前期中期を通して大木圓貝塚では家族数が大きく増加することはなかったのであろうか。家族の人数が増えた場合には住居を拡張したのだろうか、或は狭いままで生活したのであろうか。またよそから来て近くに家をたて仲間入りするということはなかったのであろうか。大木圓の丘は北の方にも伸びており、さらに丘の東西両側には小さな舌状台地がいくつもあるが、分布調査の結果では前述したB-1, B-2, B-3などの貝塚のある小舌状台地のみが、ある時期何らかの建物が設けられたらしい。丘の北半や丘の東西の舌状台地は、あるいは信仰の場となっていたところもあったかもしれない。

ところで今回出土した住居址の北に住居址から約5~6mはなれて東西方向に溝があった。溝はDJ51~56区にわたって出土したが、なおDJ57区へと伸びているらしい。完掘していないので溝の性格ははっきりしないが、出土土器は大木8b, 9, 10式が主であり、住居址より高い方にある事から住居址にともなう排水溝とも考えられる。竪穴を掘ることは、池をつくるようなもので、住居より高い方に排水溝を設け、竪穴の内部にも溝をつくって竪穴にたまる水を外に流すようにしなければ不衛生であり健康をそこなう。

(八巻正文)

B. 人工遺物

I. 土器・陶磁器

出土した土器のうち復原した3点について述べる。

図5-1, 図版I-A-1はFG60L1出土。大木8a式。胎土には石英粒を含む。器壁は8~10mm。口縁部断面の形はこの時期の特徴の1つで、口唇が内側に傾き、口縁部内面はやや湾曲している。装飾のある把手が4つつけられており、その文様は粘土紐で、ひし形とそれにつづく曲線文からなる。口縁部器面は、みがきのない断面ほぼ三角形の陰線が2本水平につけられ、そのため文様帶が2段になっている。上段には刻文が縦に並べられ下段では鋸歯状に施されて

いる。下の方の陸線の4か所にひし形の文様がある。その位置は把手と把手の間である。胴部には文様はなくよくみがかれている。口縁部最大径52cm、高さ17cm。色は内外とも、うす茶、褐、黒色などがみられる。底は行削による復原。

図5-2、岡版I-A-2はDF72L2山土。大木8b式土器。胎上には石英粒を含む。底は無文。器壁は4~5mm。器形はキャリバー形。口縁部には大突起が1つ、小突起が3つつけられ、文様の割りつけに役立っている。大突起を1つけるということは藝術的にも高度で、この時期の特徴の1つである。頸部の無文帯によって文様は口縁部と胴部とにわけられる。口縁部では縄文LRが横方向にころがされ、その後で陸線を添付し¹⁾、その陸線の両側を沈線でふちどっている。陸線の頂部は平らにみがかれているので陸線の断面は四角である。このような陸線は大木8b式の特徴である。胴部には縄文LRが縦にころがされており、縄文施文の後に沈線文(巾2mm)が描かれている。このような沈線は大木8b式の代表的な文様であり、文様の全体図、その配置は図に示すとおりである。色は器内面は浅黄、外面は浅黄、黄橙。口縁部における最大径19.3cm、高さ18.1cm。

図5-3、岡版I-A-3、DF46L2k山土。大木9式土器。胎土には金雲母を含む。底部は無文。器壁は厚さ4~5mm。器形はキャリバー形。胴部には巾4mmの浅い沈線文が描かれしており、器面同様ていねいにみがかれている。この沈線文で区画された中には縄文RLRが縦方向にころがされている。柄土がやわらかいときに縄文をころがしたらしく縄文が深く入っており目がつまっている。文様は図に示すように器面を2分する文様A・Bがあり、このA・Bの文様を中心にしてその左右に対称的にa、bの文様が交互に配置されている。沈線と沈線の間の巾は7mm以上あり、大木9式後半の様を示している。器面は内外ともていねいにみがかれしており、色は橙、褐、黒褐色など。口縁部最大径21.5cm、高さ18.7cm。

さて時期がうつるにつれ器形にも次第に変化が認められる。たとえば目でみてこれは大木9式よりも大木10式の器形に近いなどと判断する。このような形のちがいを数値であらわせればさらにはっきりする。土器の構成点を結び器形を表わしたのが図4である。2つの土器を比較しやすいように、この図では、胴部最大巾のところを一致させてみた。この図でみると図5-2の土器は図5-3の土器にくらべ頸部のすぼまりが強く胴部径に比し器高特にh₂が高いことがわかる。筆者が卒業論文で扱った大木9式土器では、下層から上層になるにしたがい特にβまたはtanβの数値の変化に規則性をみいだすことができた。

時期や地域のちがいにより、以上のように角度あるいは高さや径の比に共通性や差違がでてくるはずである。

今c=100として2つの土器の各部分の数値を示すとP.9上左の表のようになる。

1) 陸線の割落に縄文がみられる。

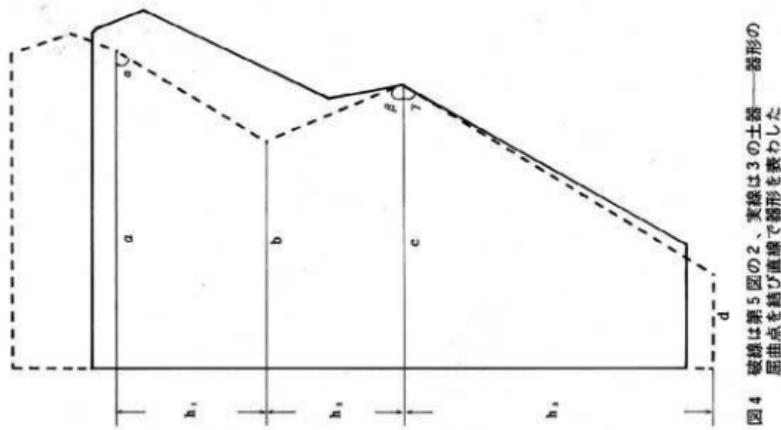


図4 線脚は第5図の2、実線は3の土器
屈曲点を結び直線で器形を表わした

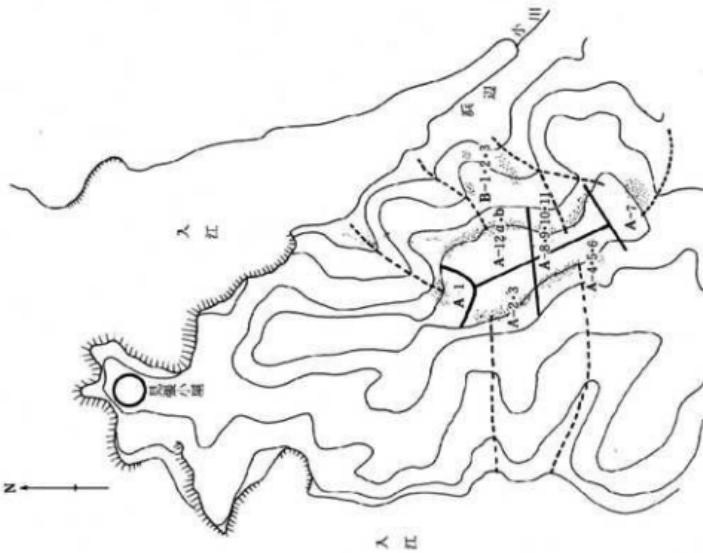


図3 大木田集落における各族への土地割定図
太い実線が土地割、破線は小道
ドットは発達などを捨てたところ（埋蔵目録分布地域）

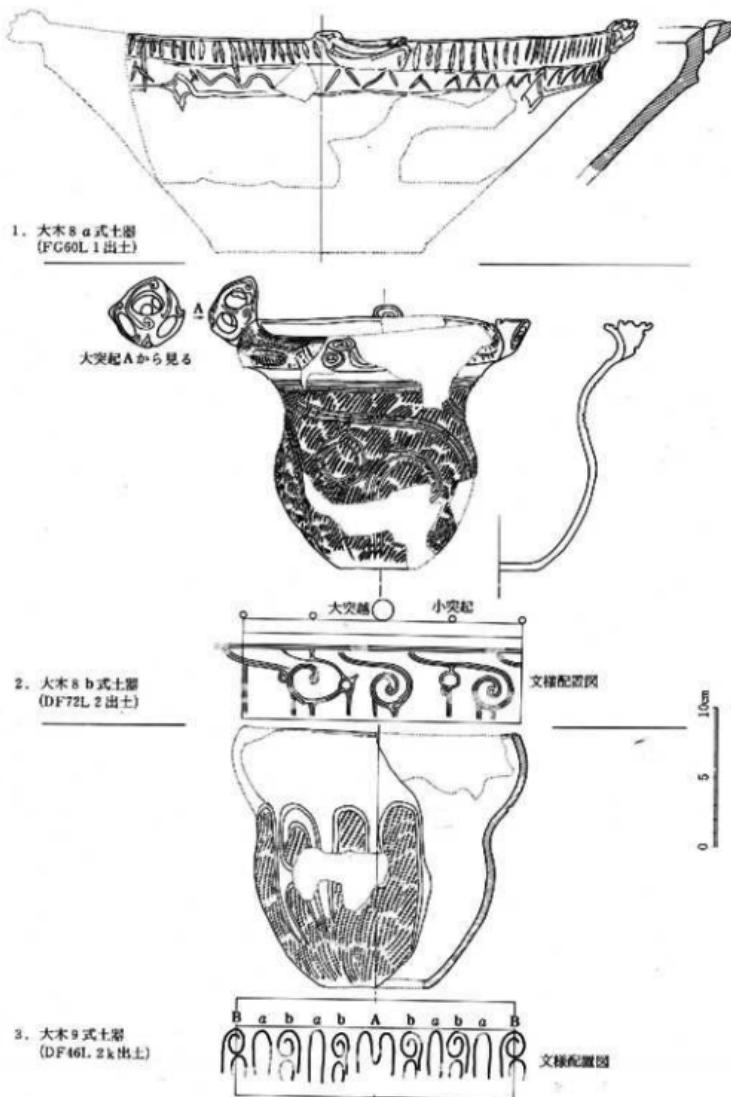


図5 大木圓貝塚出土土器実測図及び文様配置図

	図5-2	図5-3
α	59°	65°
$\tan \alpha$	1.6	2.1
β	68°	79°
$\tan \beta$	2.4	5.2
γ	58°	60°
$\tan \gamma$	1.6	1.7
a	112	126
b	80	95
c	100	100
h_1	52	65
h_2	48	26
h_3	108	99



図6 志野陶片(実物大)

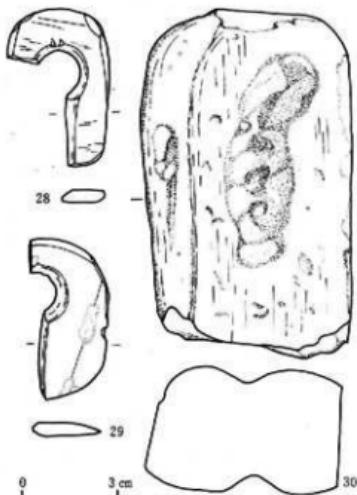


図7 石器実測図

なお土器実測図の表現は次のようにした。イ、影は入れない。ロ、欠失している部分は点線を用いた。ハ、隆線の剥落下に縄文のある部分には縄文とドットを併用した。ニ、断面図は必要に応じて半断面、破砕断面図、局部断面図を用いることにした。ホ、断面がわかりにくい場合にはハッキングを用いた。ヘ、口縁部破片で半径の求められる場合には中心線を引いた。

中世近世の陶磁器片が今回の試掘で十数片出土している。図6、図版I-B-2は志野陶片でDI47L1から出土した。胎土には砂や小石は含まれていないが緻密な土ではなく、色は淡黄、底部にはロクロ痕がある。器形は浅鉢。文様はみられない。釉は厚くはってりとしており、ところどころ釉がたれている。内側でも底部近くの釉は厚く、1mm強の部分もある。釉は内側はすべてかかっているが、外側底部はない。刷毛跡はない。釉のかかった部分は灰白色で、器の外側には黒いブツブツが多い。釉のうすいところ、釉の端は緑色である。 (八巻正文)

2. 石器・石製品

今年度の調査における各トレンチ出土の石器は、すべて表土およびその下位の層から出土している。良好な包含状態にあったものではなく、当然ながら上器型式との伴出関係も明らかではない(「発掘方法」、「調査経過」の項参照)。それゆえここでは各トレンチ出土の石器を一括し、代表的なものについて記述を進めることにしたい。なお各トレンチごとの出土数は第1表に示

してある。

○石鎚 (第8図1~9)

未完成品を含めて86点出土している。その形態は、i) 無茎で三角形を呈するもの(1), ii) 無茎で抉り込みを有するもの(2・4・6~8), iii) 有茎のもの(3・9), iv) 無茎とも有茎ともつかない卵形を呈するもの(5)の4つに大別できる。有茎の石鎚は図示した2点のみで、無茎で抉り込みを有する石鎚が大多数を占めている。石材には頁岩、黒曜石、珪岩、流紋岩、めのうなどが用いられているが、頁岩製のものが多い。この傾向は石鎚に限らず、剝片石器全般に認められる。なおアスファルトの付着した資料はみられない。

○石錐 (第8図10~12)

17点出土しており、つまみのあるもの(10・11)と無いもの(12)とに大別される。12の資料では尖端部が極度に磨滅している。

○尖頭器 (石槍)

3点とも両面加工であるが、完形品は図示した1点だけである(第8図13)。これは細身の柳葉形を呈し、頁岩製である。

○石匙 (第8図14~18)

横型(14~16)と縦型(17・18)とに大別されるが、前者は後者よりも少ない。16の資料ではつまみが左に片寄っているが、多くはほぼ中央に位置している。

○スクレイパー (第9図21・22・24)

前記の石匙もスクレイパーの一種と考えられるが、ここではつまみを有せず素材(剝片)の一側もしくは両側・全周に連続的に剝離を施して刀部を作出しているものをスクレイパーとした。形的には不定形なものが多数を占める。なおスクレイパーと一次加工痕ある剝片(retouched flake)との分類の基準は剝離の連続性である。

○石鎌 (第8図19・20)

断面が浦鉢形を呈する片刃状のものと、凸レンズ形を呈する両刃状のものとに大別されている(八幡 1935)が、4点とも後者に属するものである。19は基部が欠損している。

○石斧

4点とも磨製石斧で、緑泥片岩・粘板岩などが石材として用いられている。いずれも脇部のみの破損品であり、形態上の特徴は把握できない。

○凹石 (第9図27・第7図30)

安山岩、石英粗面岩などが用いられている。30には3面に敲打によるくぼみがある。27には両面にくぼみがあるだけでなく、側面には磨痕があり磨石としての機能も考えられる。

○磨痕ある石

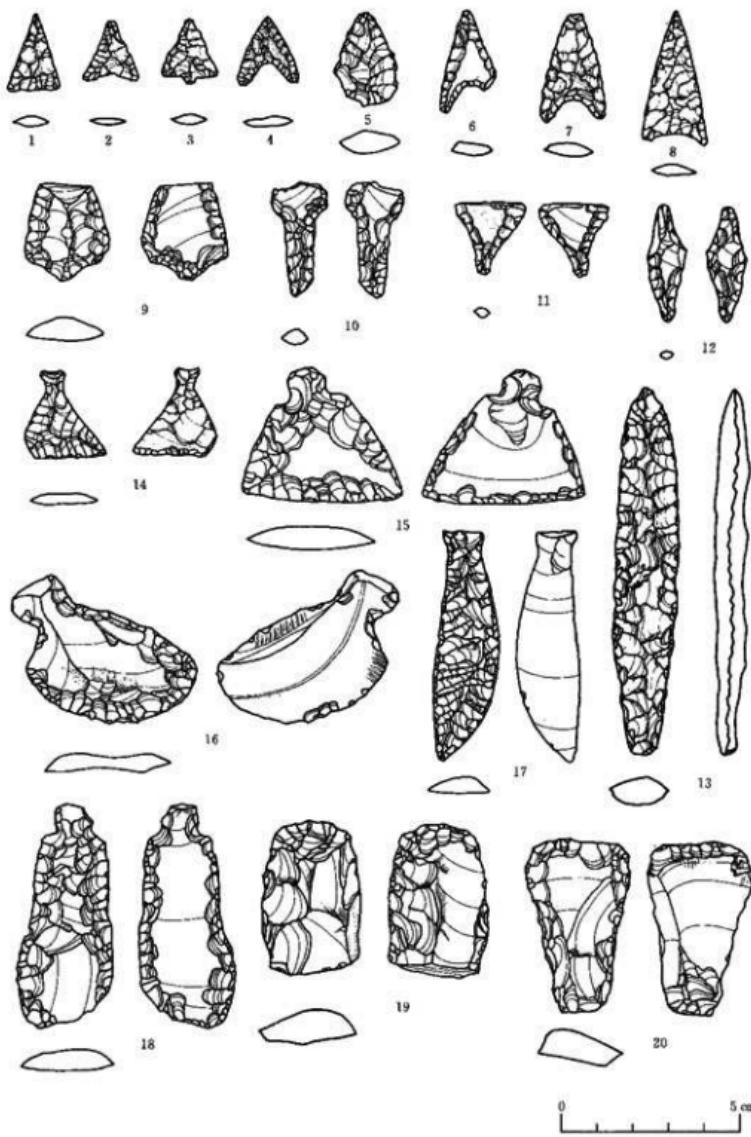


図8 石器実測図

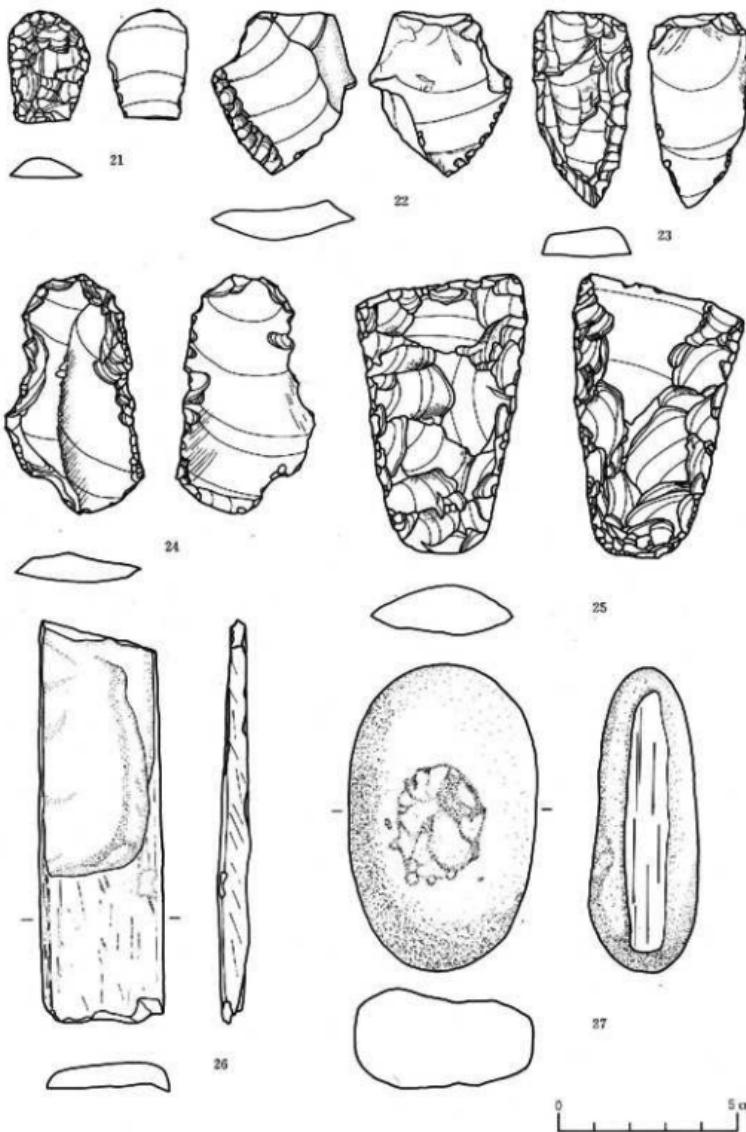


図9 石器実測図

表1 各トレンチにおける石器の出土数

石器名称	I トレンチ	II トレンチ	III トレンチ	IV トレンチ	V トレンチ	I 住居址	II 住居址	計
石 簾	28	5	27	5	9	8	4	86
石 錐	6	1	2	2	2	2	2	17
尖頭器(石槍)	0	0	2	1	0	0	0	3
石 迹	3	2	2	2	8	0	0	17
スクレイバー	3	2	7	7	6	1	1	27
石 篦	1	0	1	0	1	0	1	4
ピエス・エスキュー	0	0	1	0	1	0	0	2
石 斧	1	0	2	0	0	1	0	4
敲 石	7	0	1	3	2	2	1	16
磨 石	3	0	0	0	0	1	1	5
凹 石	5	0	1	2	1	0	1	10
磨痕ある石	17	2	3	3	2	2	1	30
石 刺	0	0	1	0	0	0	0	1
剝片・石屑	353	138	184	229	137	42	71	1154
使用痕ある剝片 二次加工品	76	14	27	44	37	15	17	230
石 核	7	5	7	4	5	3	4	35
そ の 他	4	1	0	0	0	0	1	6
块状耳飾	3	0	0	0	0	0	0	3
計	517	170	268	302	211	77	105	1650

石皿・底石・磨石などと考えられる石器の石片を含めた破損品を「磨痕ある石」として括した。安山岩・石英粗面岩などが多い。

○石劍（第9図26）

緑泥片岩製。破損品のため石棒との区別が明瞭でないが、石棒に比べて扁平度が強いという基準からすれば石劍と考えられる。なお昭和47年度の分布調査の際に1点表記されている。
○その他

第8図25は大形の剣片を素材として、基部・両側縁に調整剝離が施されているが、刃部にはわずかの剝離が施されているだけで、第一次剝離面をそのまま利用している。一応トランシェ様石器と称しておく。頁岩製。

第8図23は急角度に刃部を作り、一端を尖らせていている。スクレイバーの一種とも考えられるが断定できない。頁岩製。

○块状耳飾（第7図28・29）

いずれも片側が欠損しているが、馬蹄形を呈する。粘板岩・緑泥片岩が石材として用いられている。

最後に、人為器ではないが珪化木が6点出土している。

（千葉英一）

3. 骨角器

1) つりばり 図10-1, 図版I-C-1

D F46 L 2 から出土した。この層出土の土器片で型式の明らかな44点のうち33点が大木9式で、他は大木6, 7, 8式の土器片がわずかづつみられる。材料は鹿角。一本作り（one piece, 単式）である。チモトには溝がまわっている。アゴ（カエシ、アグ）は内側に1つつけられている。ハリ先は内弯しており、正面からみるとやや左にひねりがみられる。つりばりの種類は現在日本では1,500種類に及ぶと言われるが、現在の名称で言えば大ダイ用つりばりである。D F46 L 2 からはマダイの主上顎骨、口蓋骨が各1点づつ出土している。つりばりの大きさは高さ45.5mm、巾19.3mmである。このような型のつりばりは仙台湾付近の遺跡では大木9式のものが今のところ最も古い。楠本政助（1972）によれば石巻市南境貝塚の例も大木9式らしい。対象魚に適したハリを選ぶようになり、このようなつりばりが仙台湾でもつかわれるようになったのであろうか。魚は大木開貝塚の人々にとって重要な食料であり、魚具の改良は重大であったろう。アゴがつけられた原因にはイ、魚が逃げやすいので改良した。ロ、魚が少なくなり改良をせまられた。ハ、流行して来たなど考えられる。マダイの前上顎骨と歯骨をあわせた数でその出土量をみると、大木2b式土器が主に出土したC F44 L 3 では21点、大木9, 10式を主に出土したD F45 L 2 とL 3 の合計は40点であり、しかもその大きさも大きい。そうすると縄文時代中期末になってもマダイは仙台湾で繁栄していたとみてさしつかえない。またつりば

りが改良された結果マダイの漁獲量が急にふえたわけでもない。

2) 有孔牙飾 図10-2 圖版1-C-2

CF44区出土。出土上器は大木2a, 2b, 3式が主で大木8b, 9, 10式が少量出土した。牙は *Canis hodophylax* Tem. 或は *Canis lupus hodophylax* Tem. の左下顎の大歯と考えられる。歯根に孔があけられている。孔は両側からあけられているため断面が滑車形で、孔の壁には輪状にすじがついている。石錐の回転によりついたすじであろう。

葛生出土の *Canis lupus* は大きくがっしりしている。鹿間時夫(1949)による葛生の報告書の中に大歯の比較資料があるので転載する。単位はmm。

	大木開	葛生	hattai	Siberian wolf	<i>hodophylax</i>
C 長さ	13.4	14.0	13.5-15.0	14.5-15.5	13.0
巾	9.1	10.2	10.0-11.0	9.0-9.5	8.5

大木開貝塚出土Cの総高は50.7mm、歯冠高は23mmである。

宮城県内での類例としては、阿部 恵(1971)により報告された南最知貝塚出土の牙飾がある。

3) 実測図の表現のしかた

以下に述べることに注意し表現した。

- イ. 影を線で表現すると人為的加工による痕跡を表現した線と混同するので影を入れない。
- ロ. 自然の面は自然のままに表現
- ハ. 磨かれた部分はドットをうった。
- ニ. 打削られた面に破壊による痕跡(リング・フィッシャー)があれば表現するが、はっきりしない場合には何も描かず白いままにした。
- ホ. 人工の加わった線を強調した。

(八巻正義)

C. 自然遺物

I. 貝 図版 IV, V

発掘における採取方法には次の3つの方法がある。

- 1) 貝層を土を含めすべて収納する。貝層が二次堆積でなく第一等資料の場合にはできればこの方法をとりたい。
- 2) しかしすべて採取することは容易でないので一般には、ブロックサンプリングが行われている。ブロックは20×20, あるいは30×30cmなどがつかわれている。ブロックの位置は発掘区の角に設ける方法もあるが、貝層によってはその角にないこともおこりえる。したがって各貝層のそれぞれ最も保存の良い厚い部分にブロックを設けるのが良い。

3) 貝殻が2次堆積のように資料として良くない場合には発掘者が任意に採取しておく。採取した貝はすぐ水洗いせずに自然科学の分析にまわすものは、必要な記録をとり、泥のついたままビニール袋に入れ、雨風にさらさないようにし、早く分析にまわす、などの注意が必要である。

分類は標本を用意して行った。この標本は石川政治（市立函館博物館長）が大木岡貝塚出土の貝を鑑定して下さったものである。図鑑は以下のものを主として参考にした。

波部忠重、黒田徳米、1967（昭42）新日本動物図鑑 中巻 第2版、北隆館

波部忠重 1973（昭48）続原色日本貝類図鑑 第12刷 保育社

吉良哲明 1973（昭48）原色日本貝類図鑑 改訂19刷 保育社

図鑑をみてもなお分類に疑問の残った貝を東北大学理学部地質学・生物学教室の野田浩司に鑑定を依頼した結果、イタヤガイ、ナミギセルガイ、ヒカリギセルガイなどが同定できた。図鑑を見てマルサルボウと思った貝（図版Ⅳ-11）は野田浩司がサルボウであることを教えて下さった。

出土した貝は表2に示すとおりである。貝の名称は学名で示すのが学問上正確で便利であるが、イタリック体にするなど印刷が容易でないので学名は省き和名で表わした。和名は、前述した波部忠重、黒田徳米、1967（昭42）新日本動物図鑑、中巻、第2版 北隆館にしたがった。また、この図鑑により出土した貝の棲息場所、分布をしらべてみた（表2）。

ハイガイは現在日本では絶滅寸前であるが、縄文時代には松島湾で繁栄していたらしく、出土数も多くCS78c区出土の貝の数をしらべた結果、二枚貝で多い順からハマグリ、アサリ、カリガネガイ、マガキ、オキシジミ、ハイガイ、イガイ、シオフキ……であった。ただし大きいハイガイは少ない。小高民夫（東北大学理学部）はハイガイをつかって当時の水温を調べている。⁽¹⁾

チョウセンハマグリとウバガイは外洋に面した浅海の砂底に棲息する。大木岡の人々は住居のすぐそばの入江から貝をとるだけでなく外洋に面した代ヶ崎浜、吉田浜、花渕浜、菖蒲川浜、湊浜などに山かけて貝をとったこともあったらしい。今回の発掘ではチョウセンハマグリもウバガイも非常に少なかったが、貝塚東南部には地表にチョウセンハマグリがかなり散っている。

小池裕子（1973）はハマグリの貝殻成長線により、その貝が採集された季節を推定する研究を行っている。

(1) 野田浩司の御教示による。

表2 大木圓貝塚出土の貝—それぞれの説明は、北壁原の「新日本動物図鑑」中巻(昭和42年)を参考にした。

ページ	解説者	棲息場所	分 布
1. インダタミ	31 黒田、波部	潮間帯底	北潮海潮部以南、インド、太平洋 カラフト、北潮海潮部以南、台湾、シナ
2. コレダガシガラ	32 "	潮間帯岩礁底	本州(房総以北)、台湾、シナ
3. ケゼガイ	32 "	潮間帶岩礁間	本州(伊豆)、西太平洋
4. スガイ	38 放寄	潮間帶岩礁底	本州(伊豆)、シナ、朝鮮半島
5. ヴニナ	59 放寄	潮間帶砂礫底	本州(伊豆)、シナ、西太平洋 北海道南部以南、西太平洋
6. ツメタガイ	87 黒田、波部	潮間帶砂礫底	北海道南部以南、西太平洋
7. イボニシ	106 "	潮間帶岩礁底	本州(伊豆)、沖縄、シナ
8. レイシ	106 "	潮間帶岩礁	本州(伊豆)、沖縄、シナ
9. アカニシ	104 放寄	内海の潮間帶から水深20mの砂泥底	北海道南部以南
10. カリガキエガイ	223 放寄	潮間帶の岩礁、内海	本州(東北)以南に広く分布
11. サルガウ	225 "	潮間帶より水深10mまでの泥底	本州、三列帶以南、インド、太平洋
12. ハイガイ	226 "	"	北海道南部～九州、房総、シナ
13. イガイ	232 "	潮間帶より水深20mの岩礁に足糸で付着	北海道沿岸部～九州、房総、シナ
14. イタヤガイ	241 "	10-30mの砂泥底	本州(房総半島)～九が、房総、シナ
15. タボガキ	246 "	内海の強度の低い岩礁や岩礁に付着	本州、四国、九州、琉球、シナ
16. マガイ	71 黒田、波部	潮間帶の岩礁の潮間帯の岩礁に付着	カラフト、日本本土、琉球、シナ
17. ハマグリ	267 "	内海の強度の低い岩礁や岩礁の砂泥底	北海道南部～九が、房総、シナ
18. チョウセンハマグリ	268 "	外洋に面した浅海の砂底	本州(房総半島)～九が、房総、シナ
19. オキシシジミ	269 "	内海と外海裏部の潮間帶、砂泥底	本州、台湾、琉球、シナ
20. カガミガイ	268 "	潮間帶下より水深10mまでの砂泥底	北海道南部～九州、琉球
21. ウチムツサキ	267 "	潮間帶下部より40mの砂泥底	本州(伊豆)、房総、シナ
22. アサリ	275 "	内海沿岸の潮間帶から10mまでの砂泥、泥底	カラフト～九が、房総、シナ
23. レオフキ	279 "	砂泥の干潟	本州(房総半島)～九州、房総、シナ
24. ウバガイ	287 "	外洋に面した浅海の砂底	本州(鹿児島以北)、北海道、房総、千葉、茨城
25. マテガイ	296 "	潮間帶下の細砂底	北海道南部～九州、琉球
26. オオノメガイ	299 "	内海や内海の潮間帶砂底	カラフト～中国、北朝鮮
27. ヨマトシジミ	250 "	河川など深い部分のある(浅水域に干に生息する)	本州中部以北
28. ナミヤセンガイ	194 "	朽木落葉層	黒田、波部
29. ヒカリギルガイ	196 "	林葉下など多い	地上的落葉や草間に多い。平地の林野
30. ヒタリマキマイツイ	208 "	"	黒田、波部

松島湾の貝については野村七平、畠井小虎（1932）の報告がある。この報告の資料の大部分は塙釜で採集しているが一部外洋に面した七ヶ浜村産のものを含んでいる。

今回出土した貝のうち陸産のものを除いて、野村七平、畠井小虎（1932）の報告した貝の種類と対比すると、出土した貝の中でコシダカガニガラ、クボガイ、ウミニナ、ハイガイ、チョウセンハマグリ、ヤマトシジミが野村、畠井の報告中にはみられない。クボガイ、ハイガイ、チョウセンハマグリは今では当地よりずっと暖かな地方にすんでいる貝である。

2. 貝 図版 VI

大木開貝塚では貝層よりも魚骨層が顯著である。

魚の種の確定では石山礼藏（東京水産大学）上野輝彌（日本ルーテル神学大学）他多くのかたがたに魚骨をみていただいた。また魚について水産庁東北区水産研究所の佐藤重勝、小達繁に多くの御教示をいただきとともに貴重な文献を石山礼藏及び水産研究所から借りることができた。特記して謝意を表する。

出土した魚は次の通り。

1) ミズワニ属 *Odontaspis* 図版 VI-1

種の同定は上野輝彌。D F 80 L 1 出土。伴出土器は主として大木 9, 8 b, 10 式。その他大木各型式土器片が少數づつ出土。このサメの歯は側咬頭を持つ。歯頭の両端は歯根の両端まではのびておらず歯冠基部は短い。孔溝はあまり深くない。歯冠先端がわずかに欠けている。D F 80 L 1 出土。

外側面歯冠長 $10.8 + \alpha$ mm, 内側面歯冠長 $12.3 + \alpha$, 咬頭頂から歯根後端間距離 $13.3 + \alpha$ (側咬頭を入れない場合 $11.6 + \alpha$), 咬頭頂から歯根前端間距離 $13.85 + \alpha$ (側咬頭を入れない場合 $12.8 + \alpha$), 歯刃最大高 $19.4 + \alpha$, 咬頭頂から歯根前部先端間距離 $19.4 + \alpha$, 咬頭頂から歯根後部先端間距離 $17.65 + \alpha$, 歯根高 3.5, 歯冠幅 9.8 (側咬頭を入れない場合 7.1), 歯根巾 14.15, 歯冠厚 4.85。

トビエイ科 *Myliobatidae* 図版 VI-2

D F 46b (櫻孤地区) 歯下面、参考資料として東北大学理学部標本室 No.37206 がある。

ボラ科 *Mugilidae* 図版 VI-3

主鰓蓋骨、マボラの頭骨については Gregory, W. K. (1933) 参照。メナダの標本もつくり比較したが、主鰓蓋骨ではマボラのかメナダなのか区別ができなかった。

スズキ *Lateolabrax japonicus* C. & V.

前上顎骨 (図版 VI-4-a), 歯骨 (図版 VI-4-b)

東北大学理学部標本室には骨格全体を組立てた標本がある。

クロダイ *Mylio macrocephalus* B.

前上顎骨（図版VI-5-a）主上顎骨（図版VI-5-b）歯骨（図版VI-5-c）。マダイに次いで出土量が多い。

マダイ *Chrysophrys major* T. & S.

前上顎骨（図版VI-6-a，枝の長さ53.4mm），主上顎骨（図版VI-6-b）歯骨（図版VI-6-c枝の長さ65.5+a mm），尾舌骨（図版VI-6-d）については草下孝也（1969）参照。出土したマダイの骨は大きいものが多いがほとんどの骨は破損しているので簡単に計測値を示せるものはほとんどない。

イシダイ *Oplegnathus fasciatus* T. & S. 図版VI-7

前上顎骨。石山礼蔵の手紙は次のように話している。「巨大な上顎骨2コはイシダイ *Oplegnathus fasciatus* (TEMMINCK et SCHLEGEL) と同定します。当方のブダイ、イシダイ、イシガキダイの骨格標本と比較した結果、明らかにブダイ科ではありません。イシダイとイシガキダイとよく似ていてどちらとも決しかねたのですが標本と比較し、他とも論議した処、イシダイと決定しました。昔はこんな大きなイシダイが沿岸に居たのでしょうか。」

メバル *Sebastes inermis* C.

石山礼蔵の手紙は次のように話している。「前上顎骨2コはメバル *Sebastes inermis* (Cuvier et VALENCIENNES) と同定します。当方の骨格標本と比較測定した結果です。」

マゴチ *Platycephalus indicus* L. 図版VI-9

左の前鰓蓋骨。参考文献として KIYOMATSU MATSUBARA and AKIRA Ochiai (1955) がある。

トラフグ *Fugu rubripes rubripes* T. & S. 図版VI-10

歯骨。石山礼蔵の手紙は次のように話している。「下顎（3コ）、上顎（1コ）は明らかにフグ属 *Fugu* です。中でもトラフグとマフグのいずれかではないかと思いますが、当方の骨格標本と詳細に比較検討した結果、トラフグに一番近いかと思います。大きさから考えてシマフグとも比較しました。3種とも卵巣は猛毒ですが当時の人々はすでにフグの美味なことを知って居たのでしょう。青のないサバフグかとも思いましたが、骨の頑丈な点で符号しません」

クロマグロ *Thunnus thynnus* L. 図版VI-11

石山礼蔵の手紙は次のように話している。「この尾部扁状骨（2コ）は最初カジキ類かと思いましたが、マグロ科であることが判明しました。現在マグロ科魚類7種のうち、ホンマグロ *Thunnus thynnus* (L.) ではないかと思います。遺憾ながらホンマグロの骨格標本がないので、最後的な確定が出来かねます。大きさから考えてもカツオのではありません。塙釜、石巻はホンマグロの産地ありますから、魚屋、料理屋などに依頼して不要な尾部を譲りうけて、その骨格と比較していただくのが一番よいと思います。」

山上した魚のうちではマダイが圧倒的にその数が多い。しかしだからといってマダイを最も多くとったと言えるであろうか。骨でもくさりやすいもの、小さくて犬などが容易に食べてしまうもの、道具の材料につかわれるものは残りにくい。タイ類の頭骨でも、多く出上するのは、前上顎骨、上顎骨、口蓋骨、前鰓蓋骨、関節、方骨などであり、他の薄い骨、柔らかい骨、もろい骨は余り残っていない。骨がおかれた環境、発掘の方法、採取の方法のちがいによっても數はちがってくる。

マダイの骨は縄文時代前期中期を通じて大形である。つりばりが大きかったせいもあるが、マダイが当時松島湾で繁栄していて大きいのがたくさんいたので人形のつりばりがつかわれたのであろう。モリあるいはヤスによる刺突度を確認することはできなかった。貝類は非常に小さいものまでとっているのにくらべ対象的である。

最近季節変化と人間生活とのかかわりあいの研究が盛んである。マダイの釣り期は3月から11月である。落合 明(1973, P.709)によれば瀬戸内海の香川県福田、安田、坂山、三本松におけるマダイの最多漁獲日は、4月20日前後と5月2~3日である。松島湾内における魚類目録及びその年間出現期とその多寡については、谷田専治、堀田秀之、菅浪晋一郎(1957)の論文がある。この論文によれば湾奥の丸ノ島地先の箕浦に於ける漁獲の資料によって次のような事実が明らかになっている。

スズキ、ボラ、クロダイは秋季から冬季の水温低下に伴い、湾内から湾外に移動する。⁽¹⁾ 小達繁の御教示によれば、縄文時代は水温が今より少し高かったとしても、やはり移動したはずであるという。繁殖のため一時的に湾内に入ってくる移動性魚類には次のものがある。

春季 ドチザメ、マイワシ、イシガキダイ、ヒガンフグ、コモンフグ、コモ、ヒラメ

夏季 アカエイ、ショウサイフグ

冬季 ケムシカジカ

落合 明(1973 P.708~709)によればマダイの生息場は海底が岩礁または砂礫質で起伏に富み、水深30~150m、海水の流通が良好で、沿岸水の影響が大きく、冬季の最低水温が8~15℃であるような条件を備えていることが必要である。現在の松島湾は海底泥土が厚く堆積し、水深は浅く、冬季の最低水温は佐藤勝重、佐々木光、曾野 尚(1965)によれば4.7℃(塩釜における昭和28~37年の1月の平均水温)であり、マダイがとれることは珍しい。

3. 四肢動物

貝類と同様、資料の良し悪しにより3段階の採取方法が行われた。頭骨は破損しやすいのでとりあげる時注意を要する。同一個体と認められるものは他のものをまぜないで1つの袋に収納し

(1) クロダイは親魚だけ移動し、幼魚は残存する。

た。歯が抜けやすいものは土中からとりあげる時及び水洗いをする時歯が抜けてしまわないよう注意した。発掘の際は骨をいためないように、地下たびやズック靴をはき、キャラバンシューズははかないようにした。発掘用具も金属製のものでなく竹べらや箸が良い。

発掘は金子浩昌（早稲田大学）の御指導をいただいた。

種の鑑定については鹿間時夫（横浜国立大学）の御指導をいただいた。鹿間によれば鑑定のできる人は日本でも数少く、鑑定しようとすれば時間がかかるし、標本がそろっていないという。標本には成長したオス、メス、子の3体が少くとも必要である。しかも個体差もある。

考古学の報告書の多くは資料としてつかえるものは少い。いたずらに学名をつかっているものや骨についての記述がない報告書が多い。鑑定の専門家でない場合には、専門家に鑑定していただきその専門家の氏名を明記することによってその報告書の信頼度が高まるのであるが、鑑定者が誰か書いていないうえ、付についての説明や測定値、学名を決定した根拠を書いていない報告書が大部分である。

なお国立科学博物館分館（長谷川善和の好意による）及び東北大学理学部地質学古生物学教室（小高文夫、森 啓、野田浩司の好意による）で貴重な標本や文献を見せていただいた。特記して謝意を表す。

出土した動物は、ウミガメ科、マイルカ科、ネズミイルカ科、イヌ、ヤマイヌ、タヌキ、アナグマ、カワウソ、アシカ科、イノシシ科、ヒトなどである。ウミガメ科の遺物については、松本彦七郎（1930 P. 37）が大木開山塚から *Caretta olivacea* (E.) が出土したことを探告している。アシカ科については金子浩昌（1968）の報告がある。

ここでは今回出土したものうち一番良い資料であるイノシシ科の頭蓋骨について述べる。

イノシシ科 Suidae 図版Ⅷ

CF 44 L 4 から出土した。伴出土器は大木 2b 式が大部分で他に大木 2a, 3 式が少數出土した。

この頭蓋骨は前顎骨、顎骨、鼻骨、淚骨、前頭骨、口蓋骨が残存している。歯は左側では、 I_{1-2} , $C - M_3$ があり、 I_1 は歯槽がある。 M_3 の後部の歯冠はやや欠けている。右側では I_{1-2} , C , P_4 , M_{1-2} の歯があり、 I_1 は歯槽が残っている。 P_{1-2} 歯冠部が欠けている。

前頭骨と鼻骨間の縫合線、鼻骨後部の縫合線、前頭骨の縫合線は消えている。歯はすりへっている。成獣の雄である。

東北大学理学部地質学古生物学教室で、青島出土の *mikotonis*, 韶出土の *teizan*, 宝ヶ峰出土の *teizan*, 茅生出土の *lydekkeri* 等を見せていただいたのでこれらと比較しながら以下記述を進める。

まず頭蓋の測定値は以下のとくである。単位はmm以下は四捨五入した。

前頭骨の中心線の先端の点から顔面における鼻骨の先端までの長さ	220
眼窩の前端から鼻骨の先端までの長さ	286
側頭窩の前端から鼻骨の先端までの長さ	275
前額骨の斜めの長さ	175
前頭骨にある経線状の2本の溝の距離の最小値	27
同上の溝の長さ	107
鼻骨の最大巾	48
C直前の緊縮部における吻の巾	55
P ₄ の後部における吻の巾	55
眼窓下孔における吻の巾	54
Cの稜上における鼻口部の巾	105
Cの上にある稜の長さ	55
I ₁ の内側における口蓋の巾（歯槽縁における最小値を測定した）	45
Cにおける同上	48
P ₃ における同上	49
M ₁ における同上	42
M ₂ における同上	34
左右のM ₁ を含めた口蓋の巾（最大値、歯は歯槽縁において測定）	82
M ₃ における同上	86
M ₄ における同上	88
前口蓋孔間の横のひろがり（最大値）	19
前口蓋孔の長さ	20
顎骨の高さの最高値（歯槽縁から）	82

以上の測定値をみると、大きさでは松本彦七郎（1930 pp. 85-90）によって報告された齧出土の *Sus nipponicus MATSUMOTO teizan* とはほぼ同じで巨人である。しかし非常にちがってみえる特徴は、齧の *Sus* の鼻が平べったいのに比し、大木眞貝塚の鼻は細長いことである。この特徴を測定値で表わしてみよう。P₄の後部における吻の巾と顎骨の高さの最高値との比に100をかけた値は、青島の *mikotonis* が101、齧の *teizan* が103、大木眞貝塚のが67である。手もとにある現在のブタの標本では55である。C. C. Young (1932) によって報告された周口店の

lydekkeri の特徴の一つとして歯が平べったいことがあげられる。

歯の測定値を以下にあげる。

	長さ	はば		長さ	はば
I_1	右 15.2	9.0	P_1	右 14.6	10.8
	左 15.8	8.9		左 12.8	11.4
I_2	右 15.2	6.6	P_2	右 13.0	14.7
	左 17.3	5.8		左 17.3	14.0
I_3 歯槽			M_1	右 17.3	19.3
右	8.0	8.3		左 17.3	19.4
	左 9.4	8.0	M_2	右 24.3	23.0
P_1	右 10.9	5.0		左 24.5	22.6
	左 9.5	5.8	M_3	右 40.8	25.2
P_2	右 12.4	8.3		左 41.8	25.4
	左 13.0	9.0			

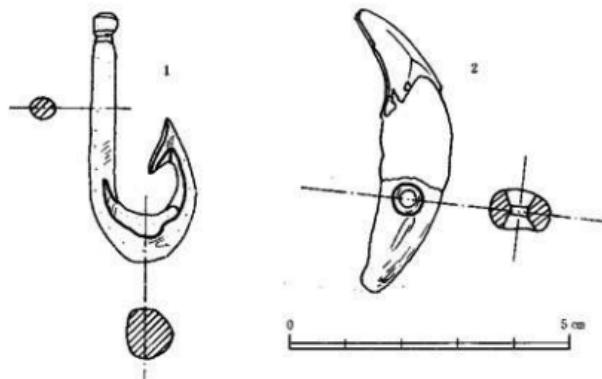


図10 骨角器(実物大)

I_{1-2} は周口店のにくらべやや小さい。 P_1 は周口店のにくらべずっと小さい。 P_{1-2} は群出土の *teizan* のそれとほぼ同じ測定値を示している。 M_1 の大きさは周口店の *lydekkeri* のそれと同じくらい大きい。しかし歯の大きさには変異がある。たとえば周口店の *lydekkeri* の臼歯の $L/W \times 100$ の値をみると、 M_1 の最小値は 91、最大値は 117。 M_2 の最小値は 108、最大値は 124。 M_3 の最小値は 163、最大値は 181である。大木郡貝塚出土の頭蓋骨の $L/W \times 100$ と他の *Sus* の値を比べてみると以下のとくである。

	大木 鳥	青 鳥	禡	葛 生
		mikotonis-	teizan	lydekkeri
M ₁	右 89	109	120	
	左 89	106	116	83
M ₂	右 105	116	124	
	左 108	116	117	95
M ₃	右 161	180	171	
	左 164	180	171	167

なお葛生の資料は葛生の Reg. No61685の歯槽で測定している。青鳥は Reg. No59935。禡は Reg. No59934である。

大木開貝塚出土の頭蓋骨のL/W×100の値は、葛生の *lydekkeri* (Reg. No61685) の率や周口店の *lydekkeri* の率の最小値に近い。しかし *Sus nipponicus* M. の場合にもこの率の値に変異があり、大木のL/W×100が、1つの種の中で最小値に近く、禡の *Sus* の率が最大値に近いとも考えられる。したがってL/W×100の率 *lydekkeri* と同じだからと言って、「大木開貝塚の頭蓋骨は *lydekkeri* である」とは言えない。

Cのエナメル帯は下部に1すじあるだけで、そのはばは16mm(最大値)である。測定値は次のとおりである。

	長さ	巾	総高
右	30.4	21.7	81.6
左	29.5	21.0	79.1

前臼歯列長	右	50.8
	左	50.2

臼歯列長	右	79.9
	左	80.6

M₁の歯槽後端からCの歯槽前端までの長さ (C-M₁) 175

M₃の歯槽後端からP₁の歯槽前端までの長さ (P₁-M₃) 128.5

臼歯列長は青島(右73, 左75)や禡(右76, 左76)のそれより長く、周口店の *lydekkeri* のそれ(84mm)よりも短い。

鼻骨の後端の位置をみると、周口店の *lydekkeri* では M_1 の前端まで伸びているが、大木開貝塚の資料では P_1 と P_2 の間にあり、櫛出土の *teizan* では P_2 の上にある。

後口蓋孔の位置は周口店の *lydekkeri* では M_1 の第1葉と第2葉の間にあり、大木開貝塚の資料では M_1 の第2葉前部から第1葉にかけてあり、青島の *mikotonis* では M_1 にある。以上の3例では後口蓋孔の位置が次に述べる2例にくらべやや後に位置している。櫛出土の *teizan* では M_1 の第1葉から M_1 の後葉にわたっており、宝ヶ峰出土の *teizan* (Reg. No59940) では M_1 の第1葉中部から M_1 の後葉にわたって位置している。

眼窩下孔の位置をみると、周口店の *lydekkeri* では M_1 の前根のところにあり、宝ヶ峰の *teizan* 及び青島出土の *mikotonis* では M_1 の中ほどから P_4 の前根に位置しており、櫛の *teizan* では M_1 の前根から P_4 の前根にあり、大木開貝塚の資料では M_1 の前根から P_3 と P_4 の間に位置する。

以上から判断すると、大木開貝塚のイノシシ科の頭蓋骨は櫛出土の *teizan* に最も近い。類似点は次のとおり。

全体の大きさが巨大である

$P_{1,2}$ の長さと巾

鼻骨の後端の位置

眼窩下孔の位置

しかし大木開貝塚のものが、*lydekkeri* や *Sus nipponicus MATSUMOTO* とちがう点は、鼻がそれほど平べったくないことである。したがって大木開貝塚出土の資料は *Sus nipponicus M.* *teizan* に最も近いが、学名を決定することができなかった。

大木開貝塚の脳頂部は脳を食べたため割られてしまったのかもしれない。

鹿間時夫 (1949 p. 80) によれば、このような巨大な *Sus* は本州においては更新世中期に突然出現し、新石器時代になると大きさも大きく、数も多くなったという。特に東北地方には多く、大木開の人々の食生活は魚類、貝類、シカ類、イノシシ類の動物に主として支えられたのであろう。

Sus nipponicus M. については松木彦七郎 (1930) が詳細に報告しているので参照されたい。

4. 鳥

鳥類の骨もかなり出土している。標本をつくりながら検討したが種の同定はむずかしい。現在国立科学博物館分館で査定していただいている。

松島における鳥については田中完一、竹丸勝郎 (1970) の報告がある。

5. 粪石

今回の試掘の結果18点の糞石を得ることができた。図版I-D-1は、断面にたくさんの魚骨がみえる。図版I-D-2は完全品で長さ45mm、長径20mmで、骨は図版I-D-1の資料ほど著しくない。

長谷部寅人(1919)は、大正7年大木岡貝塚から糞石を発掘したことを報告し「其魚骨を包蔵するを以て察するに人の住所に近く出没し或は飼養せらるる食肉獸の糞の化石せるものなるべし」と論じている。長谷部は糞石の定性分析を嘱し、その結果についても述べている。

一方古生物学では、糞石の形によって動物の種類を推定する研究がなされてきた。(WALTERS, H. et al. 1968)

ところが最近糞石が人類のものか他の動物のものか区別できる方法が開発された。これは、ERIC O. CALLEN(1967)により開発された方法で糞石の中からは、種子、植物の結晶体、花粉、葉、動物遺存体(毛、骨、殻、ウロコ)、寄生虫の卵、ダニ類などが発見され、当時の食物、人々の健康状態、調理の技術、居住していた季節、生活環境などが明らかにされてきている。

しかし人間の糞は、よほど特殊な状況におかれないとくさってしまう。また CALLEN らの方法は有機質が残っていないとできないから、アメリカの乾燥地帯の資料でもせいぜい2,000年前くらいまでしか反応しない。まして大木岡貝塚の糞石に CALLEN らの方法をとっても人の糞かどうかはわからないであろう。人骨の腹の部分に糞石が消化器官の形になって出土すれば人のものであろうが、人の糞などがまぎれ込む可能性があるので注意せねばならない。(八巻正文)

III. 分布調査 (図11)

A. 調査地域

昭和47年度に調査員福田友之によって行われた「ボーリングによる埋蔵貝層分布調査」地域の外の地域の調査を行った。但し沼地は除く。沼地は昭和49年度にボーリング調査を行う計画である。調査面積約135,000m²

B. 目的

3つの大きな目的を持って調査を行った。1つは環境整備を行うにあたり、どこにどんな施設をつくるか等全体計画をつくる為の基礎資料の作成である。この点で分布調査は他の事業に先がけ行うべきであった。また大木朋貝塚を全面発掘することは容易でないので、集落の想定や大木朋の歴史の概略をつかむには分布調査が必要である。また今後さまざまな発掘が行われようが、この分布調査により、発掘の目的に応じて発掘地点をある程度限定できるようになる。

C. 方 法

史跡の概略を早く知ることが必要なので試削はせず地表における遺物の散布状況の調査及びボーリングによる埋蔵貝層（或は遺物包含層）の確認調査を行った。

D. 経 過

笹やフジ、クズのつる、雑木が繁茂している地域は入っていくことさえ容易でなかった。刈払いは人夫が鎌により、私が刈払機を行った。刈払機をつかうと1日1,500~2,000m²刈払うことができた。しかし重労働であり、危険であるうえ、箒にあたるとすべて切りにくく、密林では動きがとれなかった。はじめ面で刈払っていたが能率が悪く線（調査の地区設定の為の方眼線）で刈払っていった。しかし夏、密林の中は暑いお暑く、人夫がこわがって進まないので一時中止し、秋から冬に再度行った。除草剤もつかってみたがねだんが高く、水を運ぶのがたいへんで、火事になりやすいし、桜の木などを枯らしてしまった。しかも雑草はなかなか枯れなかつたので中止した。分布調査は雑草が繁茂していない土地買上げ直後、或は畑で遺物がみえやすい時に行うべきである。

刈払う線の設定期はトランシットを使用した。トランシットを基準杭上に立てポールで方向をみてその線を刈払いその後15m 間隔で太い杭を打ち、杭には地点名を記入した。

調査はまず地表に散布している遺物を地形図に記録し、次に貝の散っている地域はボーリングにより埋蔵貝層があるかないかをしらべた。ボーリング棒は1mの長さのソイルオーガー及びスクリュー型ソイルオーガーを使用した。さらに15mごとに、地区割の基準点でボーリングを行った。

E. 結 果

表面採集では、てらやまから近世の陶磁器片、瓦片が採集された。WGA25地点付近から須恵器片が採集された。

貝殻は史跡内のあちこちに散布しているがボーリング調査により埋蔵貝層が発見されたのはEΔ00-05の付近だけだった。この埋蔵貝層を福田友之（1973）のA、B貝層群の呼称にならない、C埋蔵貝層と名づける。¹⁾ DK15地点付近の平地にはおびただしい貝殻や土器片が散布している。しかしボーリング調査では埋蔵貝層は確認できなかった。これは台地の高い方から流されたものであろう。

大木園の丘の北部は、切立った崖になっている（図3参照）。そのためであろう貝塚は平らな浜のある丘の奥部に形成されている。また天然の要害にもなっており、丘陵先端には見張り小屋があったかもしれない。

F. 勧 告

前述したとおり、調査したところは刈払った地区だけであり、調査の為の地区割の方眼線からはずれた地域には遺構がないとは言えない。また方眼線で刈払った地区でも枯葉などが厚く堆積していたところにも遺物がかくれているかもしれない。検土杖は1mであり1m以上深いところには埋蔵貝層がかくれているかもしれない。したがって工事の際には事前調査が必要である。

草木の伐開には最も苦労した。余り刈払わなくとも良いように環境整備する必要がある。それには廻路を整備し常緑樹を植えるのが良い。廻路は人が歩けば草ははえないし、常緑樹を植えれば下草も余りはえなくなる。²⁾ 枯草は山火事の危険もあり、地境界は刈払わねばならない。また歴史公園なので適当な場所に広場が必要である。貝塚のある台地は盗掘などを防ぐなどの管理の便からも雑草を刈払い見通しを良くせねばならない。この地域は縄文時代には住居があり、森になっていたと考えられるので、見通しが悪くならない程度に植栽する必要がある。

史跡の整備は開拓著しい七ヶ浜町において、緑地として、公園として重要になっている。したがって植栽は欠くべからざるものであるが、貝塚のある中央台地には、単に木をうえるのではなく、縄文時代の人々の生活とかかわりの深い木を遺構のないところに植えるようにするのが良い。史跡内には山菜も多く訪れる人も多い。クリやクルミなどの果実のなる木をうえ、人馬料をとって山の幸の狩りを楽しんでもらうのも良い。維持、管理を考え、七ヶ浜町の住民が活用できるような環境整備をする必要がある。

（八巻正文）

1) この地区から尖底土器片が採集された。縄文晩期の製塙土器である。

2) 明治神宮では植栽以来余り手入れはしていない。

あとがき

昭和48年度の環境整備に当って、多くの方々から指導、鞭撻をいただいた。銘記して謝意を表する。

指導委員

伊東 信雄 東北大学名誉教授

岸沢 長介 東北大学教授

加藤 孝 東北学院大学教授

岡田 茂弘 宮城県多賀城跡調査研究所所長

興野 義一 日本考古学協会員

佐々木嘉彦 東北大学教授

丸川 類一 日本国立大学講師

協力機関

文化庁記念物課、宮城県教育庁文化財保護課、加曾利貝塚博物館、七ヶ浜町中学校、七ヶ浜町文化財保護委員会、七ヶ浜町教育委員会、七ヶ浜町公民館、七ヶ浜町役場

引用文献

アルファベット順に並べた。原著者のローマ字つづりが不明の場合、ローマ字は訓令式を採用した。

阿部 恵 1971 (昭46) 宮城県南最知貝塚出土の牙製垂飾品、仙台湾刊行会、pp. 20
—21

CAHAN ERIC O. 1967 (昭42) Analysis of the Tehuacan Coprolites. The Prehistory of the Tehuacan Valley I. Environment and Subsistence, edited by Douglas S. Byers. University of Texas Press. pp. 261—289

GREGORY W. K. 1933 (昭8) Fish Skulls. A Study of the Evolution of Natural Mechanisms Amer. Phil. Soc. p. 263

長谷部吉人 1919 (大8) 石器時代遺跡に於る貝石、人類学雑誌34 (11・12) pp. 394—396

福田 友之 1973 (昭48) 史跡 大木田貝塚環境整備調査報告書I、七ヶ浜町文化財調査報告書I、宮城県七ヶ浜町教育委員会pp. 19—20

金子 浩昌 1968 (昭43) 鶴見石滬時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について—宮城県大木田貝塚の出土例を中心として—仙台湾周辺の考古学的研究、宮城教育人学歴史研究会pp. 160—190

KITAHARU MATSUBARA AND ASERA OCHIAI 1955 (昭30) A Revision of the Japanese Fishes of the Family Platyccephalidae (the Flatheads), Memoirs of the College of Agriculture, Kyoto Univ. 68p. 32

小池 裕子 1973 (昭48) Daily Growth Lines of the Clam, *Meretrix Lusoria* —A Basic Study for the Estimation of Prehistoric Seasonal Gathering —J. Anthropol. Soc. Nippon 81pp. 122—138

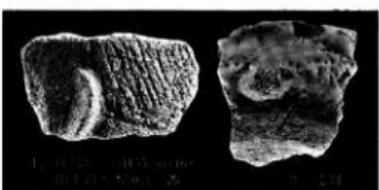
- 草下 孝也 1969 (昭44) 魚類の顎面骨の研究—I. 100魚種の尾舌骨 (Urohyal) の形状について うみ7(2) 日本海洋学会誌pp.126-143
- 榎本 政助 1972 (昭47) 先史, 矢木町史 I, 矢木町史編纂委員会 p.253
- MATSUMOTO HIROSHICHO 1930 (昭5) Evidences of the Post-Glacial Cycle of climatic Change in North Eastern Japan based upon a Study of the marine Molluscs and Mammals from the Sites at Daigi, Miyagi District, at Hibiku, Mono District, and at Miyato Island, ditto, all, Province of Rikuzen Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. ser.2 13(3) pp.35-44 PL. X1-XV
- MATSUMOTO HIROSHICHO 1930 (昭5) On a New Race of *Sus* from the Type-Site of Atsutean Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. ser. 2 13(3) pp.49-50 PL. XVI
- MATSUMOTO HIROSHICHO 1930 (昭5) On the Type-Material of *Sus nipponicus sendai* Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. ser. 2 13(3) pp.57-58 PL. XVIII-XXIX
- MATSUMOTO HIROSHICHO 1930 (昭5) Report of the Mammalian Remains obtained from the Sites at Aoshima and Hibiku, Province of Rikuzen Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ. ser. 2 13(3) pp.59-93 PL. XXX-XXXVIII
- 野村 七平, 畑井 小虎 1932 (昭7) 松島湾有歯軟体動物概報, 斎藤報恩会博物館時報, 報告号II pp. 2-16
- 小笠原好彦 1968 (昭43) 東北地方南部における前期末から中期初頭の繩文式土器—昭和38年発掘宮城県大木団員塚出土土器の内容と繩文員塚出土上器の占める位置—仙台湾周辺の考古学的研究, 宮城教育大学歴史研究会pp. 21-35
- 落合 明 1973 (昭48) マダイ *Pagrus major* (Temminck et Schlegel) 魚類学(下)水産学全集19・3 版 恒星社厚生閣pp. 704-709
- 化謙 重勝, 佐々木 実, 背野 尚 1965. 増養殖漁場の水産, 東北海域に於ける浅海漁業第二集, 東北区水産研究所増殖部pp. 12-13
- SHIKAMA TOSHI 1949 (昭24) The Kuzui Ossuaries Geological and Palaeontological Studies of the Limestone Fissure Deposites in Kuzui Totigi precture Sci. Rep. Tohoku Univ. 23
- 菅原 正明 1972 (昭47) 繩文時代の築造, 考古学研究19(2)考古学研究会 pp. 47-63
- 田中 完一, 竹内 勝郎 1970 (昭45) 松島湾およびその沿岸の鳥類, 特別名勝松島, 宮城県教育委員会 pp. 125-134
- 田中 完一, 竹丸 勝郎1970 (昭45) 松島湾鳥類目録, 特別名勝松島, 宮城県教育委員会, pp.151-156
- 谷田 専治, 堀田 秀之, 菅波晋一郎 1957 (昭32) 松島湾の魚類相について, 日本水産学会東北支部会報 8 (1, 2) pp. 1-10
- 田澤 金吾 1940 (昭15) 貝塚, 人類学先史学講座15, 雄山閣 pp. 1-33
- 山内 清男 1929 (昭4) -4月, 関東北に於ける繩文土器, 史前学雑誌1(2) pp. 1-30
- 八幡 一郎 1935 (昭10) 奥羽地方発見の鹿状石器, 人類学雑誌50(5) pp.196-200
- YOUNG C. C. 1932 (昭7) On the Artiodactyla from the Sinanthropus Site at Chouk'outien Geological Survey of China Pal. Sin. ser. c vol. 8 fasc. 2 pp. 5-15
- WALTER HÄNTZSCHL, FERD. EL-BAS, G. C. AMSTUTZ 1968 (昭43) Coprolites -Annotated Bibliography, The Geological Society of America, INC



A 土器



C 骨角器



↑ B 土器片、陶片

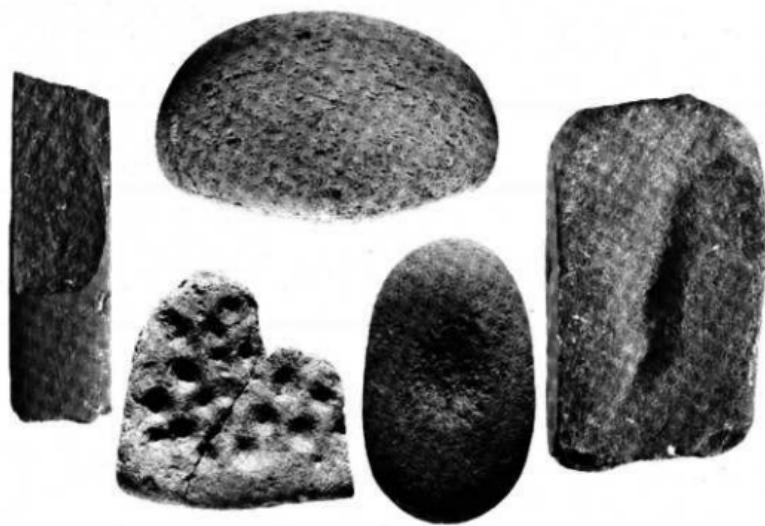
↓ D 粪石(Coprolites)



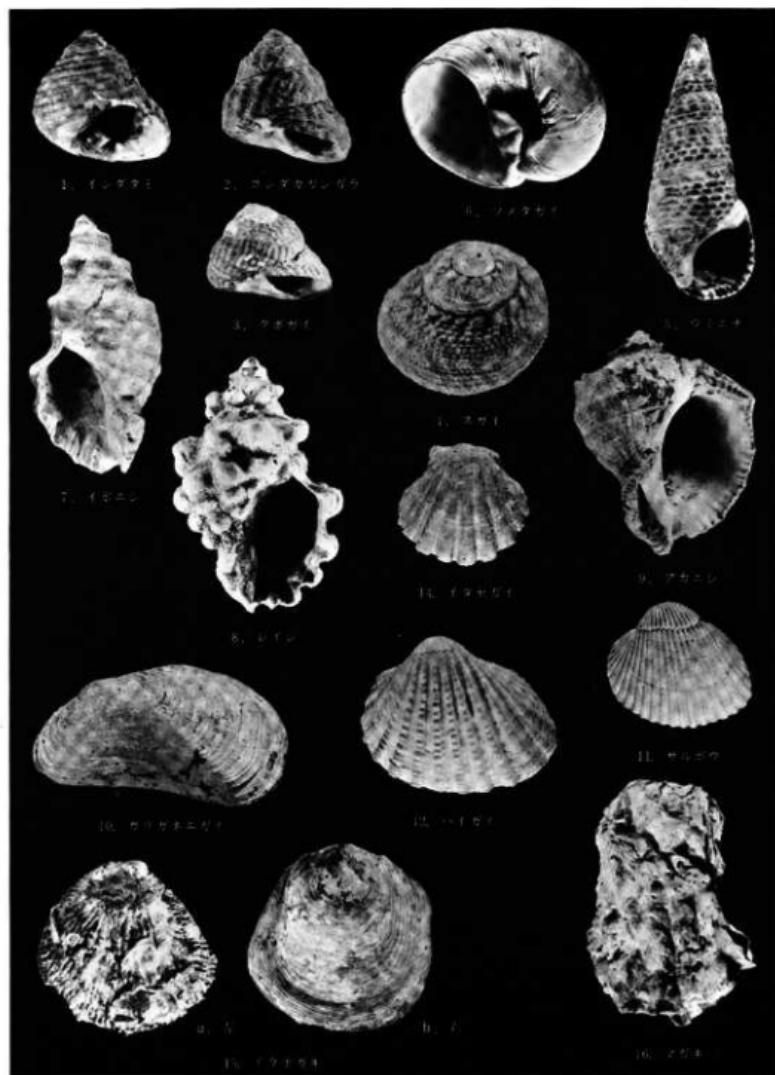
図版 I 大木圓貝塚出土の遺物



図版II 大木圓貝塚出土の石器・石製品



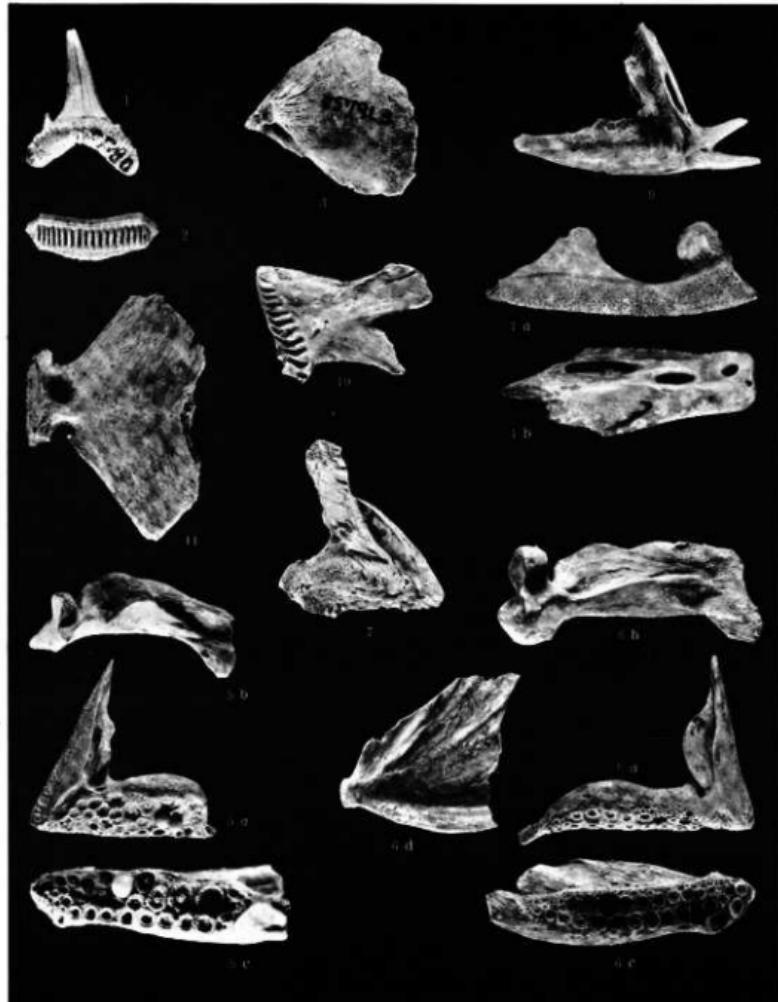
図版III 大木圓貝塚出土の石器・石製品



図版 IV 大木貝塚出土の貝

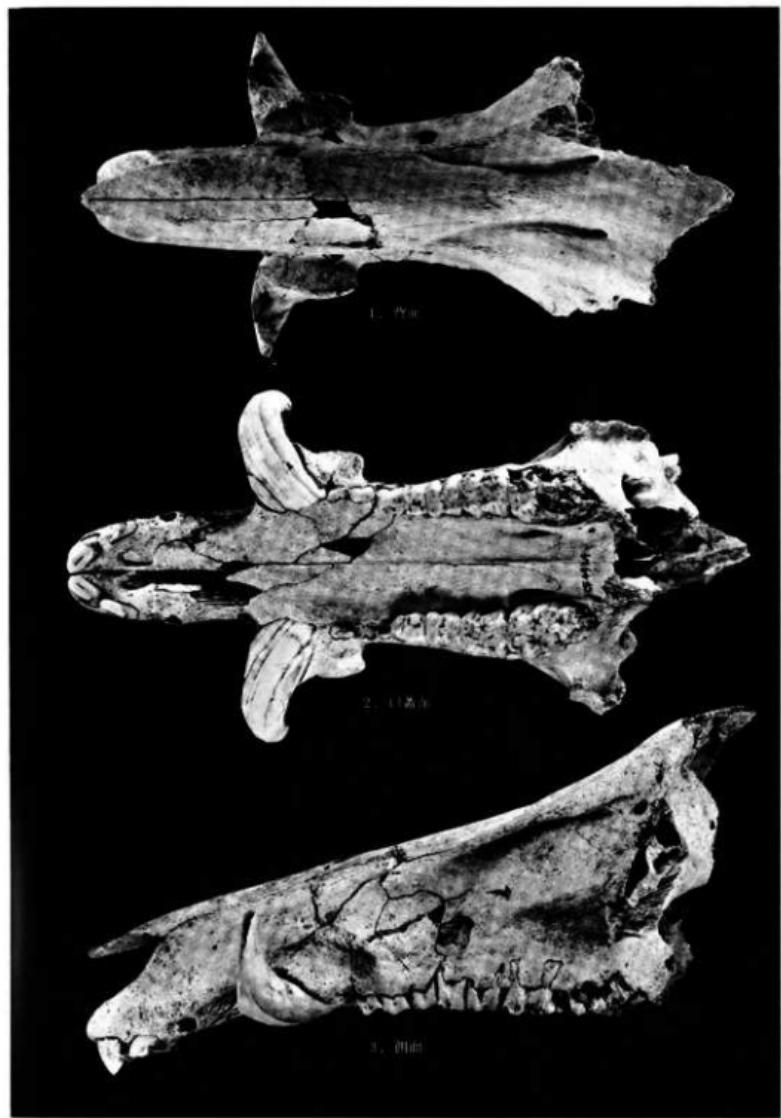


図版 V 大木貝塚出土の貝

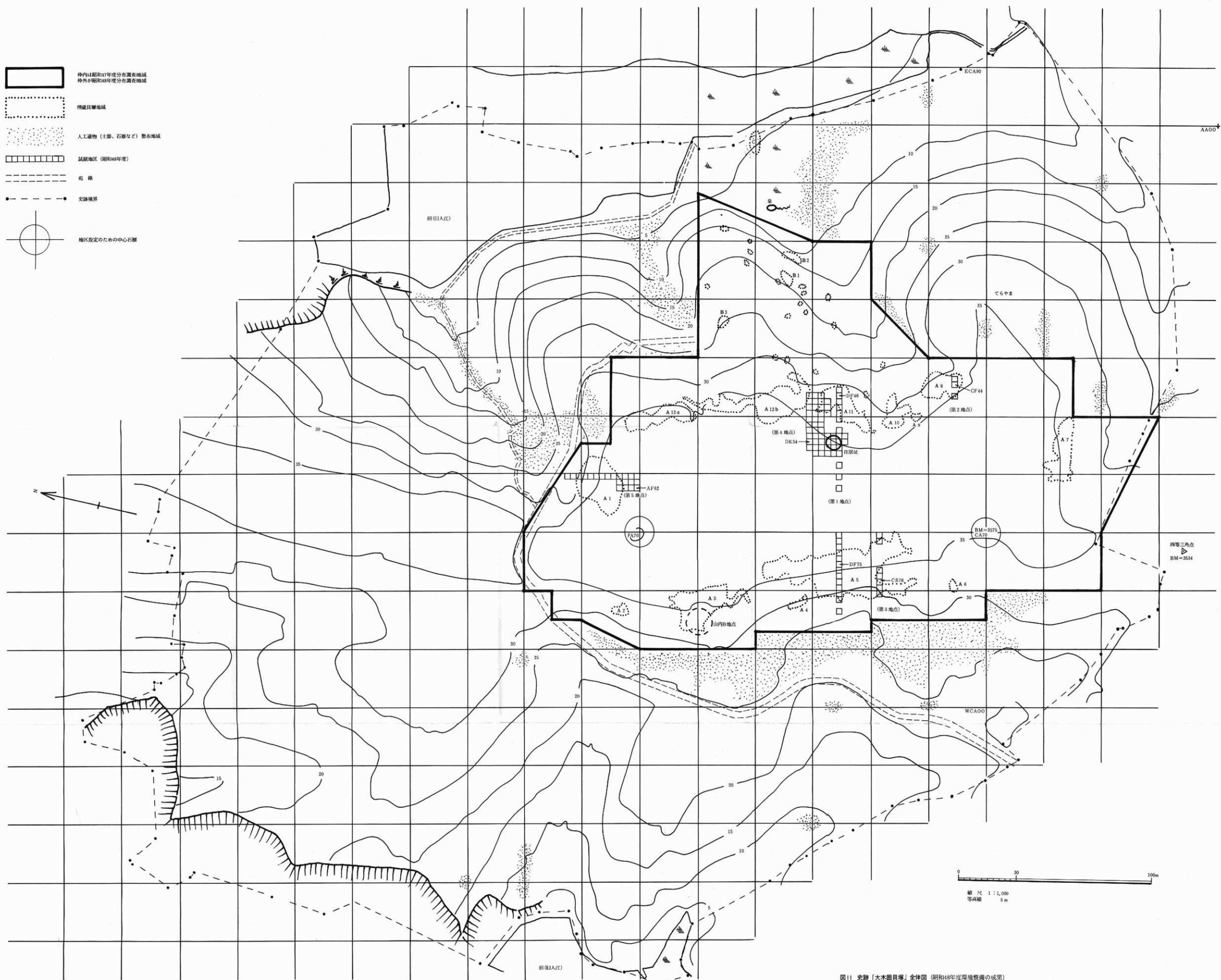


1. ミズワニ科の歯 2. トビエイ科歯下面 3. ボラ科主細蓋骨 4. スズキ a. 前上頸骨 b. 歯骨
5. クロダイ a. 前上頸骨 b. 主上頸骨 c. 歯骨 6. マダイ a. 前上頸骨 b. 主上頸骨
c. 齧骨 d. 尾舌骨 7. イシダイ前上頸骨 9. マゴチ前細蓋骨 10. トラフグ歯骨 11. クロマグロ尾部扁状骨

図版VI 大木岡貝塚出土の魚骨



図版VII 大木田貝塚出土のイノシシ科の頬蓋骨



正誤表

ページ	行	誤	正
2	3~4	史跡-調べる。	史跡「大木畠貝塚」環境整備事業にかかる大木畠貝塚の現生植物の調査
16	上から 11	刺草頭	刺草頭
	下から 8	(Ohki) Ohwi	(Ohwi) Ohwi
17	上から 18	Chenopodiaceae	Chenopodiaceae
24	〃 2	Zanthoxylum	Xanthoxylum
30	〃 2	(J. F. Gmel.)	(T. F. Gmel.)
31	〃 9	Merrill	Mervill
32	下から 4	britannica	britanica
33	〃 13	bonariensis	bonoriensis
34	〃 8	すぐくついて	すぐくついて
	〃 11	ゲン (センダン科植物)	タン (センダン科植物)
41	写真11の説明文 中	ミツバ	ミツバ
43	図版 6 E の見出	アカハツ	アカマツ
45	写真21の説明文 中	ヌルデ	ヌルデ
	3	S 25,000	(抹消)
図版 9	10	西斜面	西斜面
	図-A 地区	史蹟大木畠貝塚	史跡大木畠貝塚

史跡「大木囲貝塚」の植物
(第一次調査報告)

学芸員 中條 幸
目 次

はじめに	(1)
1. 調査計画	(2)
2. 調査結果	(4)
(1) 植生概観	(4)
(2) 植物相	(4)
所産植物目録	(4)
むすび	(35)
3. 付録	(36)
(1) 植生写真	(37)
(2) 植生地図	(47)

は　じ　め　に

史跡「大木囲貝塚」環境整備事業の一環として、当貝塚の現生植物の調査を委嘱された。

筆者は委嘱の趣旨にそのため、本文 1. 調査計画の項の如き計画を立て、第1回調査（昭和48年8月20日）より第8回調査（昭和49年2月3日）までに観察し確認した植生の概観と植物相、特に所産植物目録をあげ、貝塚の発掘ならびに環境の保護育成・展示活用などの関連を考え、必要と思われる事項として、各種類の学名・和名・漢名、分布一当地区内（A・B・C・D・E・F・G、後出植生概観および植生地図・写真参照）・国内・国外、植生・花期（月）、利用、その他の事項を併記した。

この調査は、年度半ばから始めた関係で、未だその一斑を垣間みたに過ぎない。従って調査の内容も十分とはいえないが、ひとまず第一次調査報告として整理し発表した。調査を進めるに当って、便宜を与えられた当史跡調査員八巻正文氏および作業員の方々に深く感謝の意を表わしたい。

1. 調査計画

A. 委嘱された事項

史跡「大木開貝塚」環境整備事業にかかる試掘調査、植物分類学－大木開貝塚の現世植物を調べる。

1. 目的

- a. 原始時代と現在との相違
- b. 気候の変化
- c. 人間生活と植物 大木開貝塚に生えている植物は何に使われたか
- d. 環境整備と植物 林や森の保存

2. 方法

- a. 種類のリスト
- b. 分布
- c. 用途
- d. 標本…消滅したり、変化したりするので資料の保存
- e. 保存すべきものの範囲

B. 実施事項

第一次実施事項（昭和48・49・50年度）

1. 基本調査（昭和48～49年度）

全地域を一通り観察し概観する。

- a. 写真による記録、植物景観・植生・個々の植物など
- b. 採集標本の作成 保存用（新聞紙）・展示用（台紙）
- c. 観察記録 形態・分類・生態に関する事、萌芽・開花・結実・紅葉・落葉など
- d. カードによる整理（台帳） 学名・和名・漢名、分布、植生・花期、利用、その他必要事項など
- e. 植生地図の作成

2. 精密調査（昭和49～50年度）

季節を追って毎月1～2回、全地域を巡回し観察・採集・写真や記録による調査をする。

- a. 季節による変化をカラー・モノクロ写真に収める。植物景観、代表的植物の萌芽・開花・結実・紅葉・落葉など

- b. 未発見の植物の精査 (1. - a. ~ d. に準ずる)
- c. 隣接周辺地区の植物調査 (移植活用, つぎの3. ~ 4. の項の資料として)

第二次実施事項 (昭和50・51・52年度)

- 3. 保護育成 (昭和50~51年度)
 - 文化財としての保護とともに, 標極的な育成をはかる。
 - a. 自然区 (自然そのままで) ・半自然区 (管理して植生のバランスをとる) ・人工区 (発掘した地域の保存展示)
 - b. 隣接周辺地域の植物の移植と育成, 森林・草地などを育成
 - c. できれば現在の地域以上に, 借景となる周辺の自然を緊急に保護と確保
- 4. 展示活用 (昭和51~52年度)
 - 史跡公園として整備し, 資料館なども設置して, 学校・社会教育の分野で活用する。
 - a. 観察路をつくる。貝塚や自然を観察しやすいように整理し, 名札や説明板・資料などの用意
 - b. 資料館の設置 関係資料の収集保存, さらに展示
 - c. 教育活動 考古・自然の学習教室, 観察・見学会, 各種の講座などの実施
 - d. 専門学術 (特に考古学を中心とした) 研究センターとしての活動

2. 調査結果

(1) 植生概観

当地域の植生状況については、なお精細な観察調査を必要とするが、現在までの調査ではつきの如く7地区に区分するのが適当であると考える。

A：台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）

B：スギ・クロマツ・落葉広葉樹林地区

C：低地・湿地・沼沢地区

D：竹林・落葉広葉樹林、同伐採地区

E：アカマツ・ナラ林、同伐採地区

F：西斜面凹耕作地区

G：西側断崖地区

（註：3. 付録(1) 植生写真1-23および(2) 植生地図 参照）

なお、各地区的植生状況については、次年度の観察調査を加え、資料の整理をまって詳細な報告を行ないたい。

(2) 植物相

植物相の詳細については、観察調査の途中でもあるので、次年度の調査を実施した上で発表することとし、第1回調査（昭和48年8月20日）より第6回調査（昭和48年11月4日）までに確認したもので、種・変種・品種を含めて、73科245種類の所産植物目録を示した。

なお、各種類の記述は、学名・和名・漢名、分布一地域内（A・B・C・D・E・F・G、前出参照）・国内・国外、植生・花期（月）、利用、その他必要事項とした。なお、学名および和名、分布、植生・花期などは、大井次三郎著：日本植物誌 シダ篇・類花篇 改訂新版（昭和47年6月全文堂）に準拠した。また、学名・和名の一部や漢名、利用やその他については、牧野富太郎著：牧野新日本植物図鑑（昭和45年4月北隆館）を参考とした。

所産植物目録

PTERIDOPHYTA 羊齒植物

Equisetaceae トクサ科

1. *Equisetum arvense* Linn. スギナ 間荆

A・C、北海道・本州・四国・九州、北半球暖帯以北寒帯、平地や山地の日当りよい草地・裸地に普通、—III—VI—、ツクシ（土筆）は食用、スギナ（杉菜）は若葉を食用。

Osmundaceae ゼンマイ科

2. *Osmunda japonica* Thunb. ゼンマイ

B, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 南樺太・朝鮮・台湾・中国・ヒマラヤ, 山地や原野・水辺に普通, —IV—V (—X)—, 若い葉をゆで乾燥して貯え食用, 銭巻の意味で胞子葉が巻いて円いのを錢にたとえた。

Pteridaceae ワラビ科

3. *Pteridium aquilinum* (Linn.) Kuhn var. *latiusculum* (Desv.) Underw. ワラビ 蔵

A・B・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・樺太・南千島・カムチャッカ・シベリア・欧州・北米東部, 種としては世界の熱帯および温帯に広く分布, —III—X—, 日当たりのよい山地斜面に普通, 若い葉を食用, 根茎を打ちくだいて澱粉をとる。これを蔵粉といい, 食用や糊の原料とする。残りの茎を蔵縄とする。ワラビのワラはから(茎)に通じ, ビは食用になる実質のあるミ(実)の転化とする説がある。

Aspleniaceae オシダ科

4. *Onoclea sensibilis* Linn. コウヤワラビ

B・C・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・南千島・南樺太・東シベリア・北米, —IX—X—, 原野・水辺など湿った所にやや普通, 高野蔵 高野山(和歌山県)に産すると思われた。

5. *Polystichum retroso-paleaceum* (Kodama) Tagawa サカゲイノデ

B, 北海道・本州・四国・九州, 山中の林地, 猪の手, 鳞片を密にかぶったこぶし状に巻いた若い葉をイノシシの手にたとえた。

6. *Rumohra Miquelianæ* (Maxim.) Ching ナライシダ

B・G, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山中の林内, 奈良井羊齒 明治13年(1880)長野県西筑摩郡奈良井で採集したによる。

7. *Dryopteris lacera* (Thunb.) O. Kuntze クマワラビ

B・D, 本州・四国・九州, 朝鮮・漢州, 山地の林内, 熊蕨は葉柄基部の黒っぽい鱗片が密生するのを, 熊が多毛であるのになぞらえた。実葉の羽片は葉身の上部にあって, 冬期に枯れて落ちる。

8. *D. monticola* (Makino) C. Chr. ミヤマベニシダ

G, 北海道・本州・四国, 朝鮮・南潤州, ブナ帯以上の林下に生える。深山紅羊齒はベニシダに似て深山に生えるの意。

9. *Lastrea totta* (Schltdl.) Ohwi ミゾシダ

G, 本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・台湾・中国・マレーシア・印度・アフリカ, 山野の湿った所に普通, 溝羊歯は溝附近の湿った所に多くみられる。

10. *L. oligophlebia* (Baker) Copel. ヒメワラビ

B, 本州(宮城県以南)・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・台湾・ミクロネシア・濠州, 低地・丘陵地の森林に普通, 姫蕨は葉がワラビに似ているが細裂・うすくて弱い感じによる。

11. *Athyrium grammoides* (Presl) Milde ホソバシケシダ

G, 北海道・本州・四国・九州, 低地・低山地の日蔭に普通, 変化が多い, 細葉湿気羊歯の意。

12. *A. Yokoscense* (Franch. et Savat.) H. Chr. ヘビノネコザ, カナクサ

D, 北海道・本州・四国・九州, 樺太・朝鮮・満州・東シベリア, 低地や山地に普通, 変化が多い, 蛇の寝御座の意味, カナクサは金草の意で, 鉱山の坑道や鉄石の捨場によく茂るによる。

13. *A. niponicum* (Mett.) Hance イヌワラビ

G, 北海道(南西部)・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国・台湾, 低地・丘陵地に普通, 犬蕨は普通にあって利用価値のないワラビの意。

14. *A. vidalii* (Franch. et Savat.) Nakai ヤマイヌワラビ

B・G, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・台湾, 山中林下に普通, 変化が多い, 山犬蕨は山地生のイヌワラビの意。

Aspleniaceae チヤセンシダ科

15. *Asplenium incisum* Thunb. トラノオシダ

B・G, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 樺太・南千島・カムチャッカ・朝鮮・満州・中国, 低地・丘陵地に普通, 中軸の下半部下面が栗褐色, 虎の尾羊歯は細長い葉の形を虎の尾にみたてたが, 実状にそわない。

SPERMATOPHYTA 種子植物

Pinaceae マツ科

16. *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. アカマツ, メマツ

B・E, 北海道(南部)・本州・四国・九州, 朝鮮, 山野に最も普通, 品種も多く, クロマツとの雑種もある, 一V一VI一, 材は建築・器具・土木用, 松脂はテレピン油の原料。

17. *P. thunbergii* Parlat. クロマツ, オマツ

A, 本州・四国・九州, 南朝鮮(島), 海岸地方に自生, 変種が多い, —VI—, 材は建築・土木用, 幹から松脂, 葉から香油。

Taxodiaceae スギ科

18. *Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don スギ 備木

B・D・G, 本州・四国・九州(日本特産)自生, 普通は植林, —III—IV—, 材の用途は広く, 主要樹木の一つで園芸品種も多い。

Cupressaceae ヒノキ科

19. *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. ヒノキ

B・G, 本州(磐城・関東以西)・四国・九州に自生, 各地に栽培, 品種はなはだ多い, —IV—
火の木の意味で, 大昔の人がこの木をこすり合せて火を出したことによる。材は用途広く建築材など。

ANGIOSPERMAE 被子植物

MONOCOTYLEDONEAE 單子葉植物

Typhaceae ガマ科

20. *Typha latifolia* Linn. ガマ 香蒲

C, 北海道・本州・四国・九州(南部), 北半球温帶全般, 沼澤地や水中に群生, —VI—VII—, 花粉は蒲黄と称し薬用, 葉はむしろや敷物。

21. *T. orientalis* Presl コガマ

C, 本州・四国・九州, 中国・フィリピン・ウスター, 池・沼の水中に群生, —VII—VIII—。

Gramineae イネ科

22. *Phyllostachys bambusoides* Sieb. et Zucc. マダケ 苦竹

D, 東北以北の寒地を除き広く栽培, 中国原産, —VI—, 稈は竹細工用, 筍は食用。

23. *Arundinaria chinensis* (Franch. et Savat.) Makino アズマネザサ, シナガワダケ

B・D・E, 本州(関東北部より東北南部), —VI—。

24. *Calamagrostis arundinacea* (Linn.) Roth var. *brachytricha* (Steud.) Hack.

ノガリヤス、サイドウガヤ

E, 北海道(西南部)・本州・四国・九州, 欧亞大陸, 丘陵地・山地に最も普通, —VII—X—。

25. *C. epigeios* (Linn.) Roth ヤマアワ

D, 北海道・本州・四国・九州, アジア・欧州・北米の温帯, 平地・山地の草原や林間, 近海の砂地, —VII—IX—, 山稜は山地にはえ花穂が葉に似ているの意。

26. *Avena fatua* Linn. カラスムギ

A, 日本その他温帯地方, 欧州・西アジア・北アフリカ原産, 平地や廃地, —IV—VII—。

27. *Achnatherum pekinense* (Hance) Ohwi ハネガヤ

C, 北海道・本州, 東シベリア・中国北部・朝鮮・樟太・南千島, 山地草地や林地, —VII—IX—, 羽茅 *Stipa pennata* Linn. の羽状毛に名付けられたもの。

28. *Leersia oryzoides* (Linn.) Sw. エゾノサヤヌカグサ

C, 北海道・本州・四国・九州, 北半球温帯地方に広く普通, 水湿地, —VII—X—。

29. *Zizania latifolia* Turcz. マコモ 薩

C, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 東シベリア・中国・インドシナ・台湾, 沿・池や溝中に群生, —VII—X—, コモヅノというのは一種の菌に犯された茎の芽で, 琉球・台湾および中国で食用。

30. *Phragmites communis* Trin. ヨシ, キタヨシ, アシ 薩

C, 北海道・本州・四国・九州, 世界の温帯・暖帯・亜寒帯一般に広く分布, 沼・河など水湿地に群生, —VII—X—, アシは葦(はし)の変化したもの, ヨシはアシが(葦)に通ずるのでこれを嫌って名付けた。

31. *Eragrostis ferruginea* (Thunb.) Beauv. カゼクサ, ミチシバ

A・C, 本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国・ヒマラヤ, 平地の路傍や堤防に群生, —VII—X—。

32. *Pennisetum alopecuroides* (Linn.) Spreng. チカラシバ, ミチシバ

A・C, 北海道(西南部)・本州・四国・九州・琉球, 中国・朝鮮・台湾・フィリピン, 平地, 草原路傍に最も普通, —VII—IX—, 子どもが茎を使って強さ比べをして遊ぶ。

33. *Setaria viridis* (Linn.) Beauv. エノコログサ 狗尾草・莠

A・E, 北海道・本州・四国・九州, 世界の温帯に広く分布, 平地の草原や路傍に最も普通 —VII—IX—。

34. *S. viridis* (Linn.) Beauv. forma *purpurascens* Maxim. ムラサキエノコログサ

F, 花序が紫色。

35. *S. faberi* Herrm. アキノエノコログサ

F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国・台湾, 北米に帰化, 草原や路傍, 一四
- IX -。

36. *S. glauca* (Linn.) Beauv. キンエノコロ

F, 北海道・本州・四国・九州, 北半球温帯一般, 草原や路傍・廃地に普通, 一四-X-,
花穂が黃金色。

37. *Oplismenus undulatifolius* (Ard.) Roemer et Schultes ケチヂミザサ

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国から旧世界の温帯・暖帯・亜熱帯, 丘陵地
林内蔭地に群生, 一四-X-, 縮み笠の意。

38. *Echinochloa crus-galli* (Linn.) Beauv. var. *crus-galli* イヌビエ 野稗

C, 本州・四国・九州, 世界の暖地・熱帯に広く分布, 原野の廃地・路傍・溝辺に発生, 一
VII-X-, 犬稗は食用にならないヒエの意。

ケイヌビエ (*Panicum Crus-galli* Linn. var. *echinata* Makino) C, 髄毛は黒紫色剛毛, イヌ
ビエに含める。

39. *Isachne globosa* (Thunb.) O. Kuntze チゴザサ

A・C, 北海道・本州・四国・九州, 中国・東南アジア・オーストラリア, 湿地・溝畔に群生,
VI-VIII-, 稚兒笠の意。

40. *Misanthus sinensis* Anderss. ススキ, カヤ芒

A・B・D・E・G, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 南千島・朝鮮・中国・台湾, 内陸
の山野に大群落, 変化が多い, 一四-X-, 花穂をオバナ(尾花)といい秋の七草の一つ, カヤ
は刈屋根の意で刈根をふく。

41. *Spodiopogon sibiricus* Trin. オオアラススキ

E・G, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国・シベリア, 山野草原に普通, 一四
- X -, 大油ススキの意。

42. *Microstegium vimineum* (Trin.) A. Camus var. *polystachyum* (Franch. et Savat.)

Ohwi アシボソ

E, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・台湾・マレーシア・インド・コウカサ
ス, 原野・林地内, -IX-X-, 脚細の意で脚部の茎が上部より纖細なるによる。

43. *Anthoxanthus hispidus* (Thunb.) Makino コブナグサ

B・C, 北海道・本州・四国・九州, アジアおよびアフリカ東北部(?) 热帯一般, いたる
所の川牀・原地・林中に群生, -IX-X-, 八丈絹(八丈島)の黄色染料, 小鮋草の意で葉の形
による。

44. *Themeda japonica* (Willd.) C. Tanaka メガルガヤ, カルカヤ

E, 本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国・インド, 丘陵地, 一IX-X-, 刃カヤは屋根ふきのため刈る草の意。

Cyperaceae カヤツリグサ科

45. *Cyperus orthostachyus* Franch. et Savat. ウシクグ

C, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国・満州・ウスリー・アムール・ダフリア, 湿地に普通, 一VII-X-, 牛クグはクグがカヤツリグサ類の古名。

46. *C. microiria* Steud. カヤツリグサ, キガヤツリ

A, 本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国, 草地・畑地や荒地に最も普通, 一VII-X-, 蚊帳釣草は茎を子どもの遊びに使う。

47. *Scirpus wichurae* Böcklr. アブラガヤ, アイバソウ

C, 北海道・本州・四国・九州, 湿地に普通, 変化が多い, 一VII-X-, 油ガヤは花穂が油色で油くさい。

48. *S. triquetus* Linn. サンカクイ

C, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・ウスリー・満州・中国・マレーシア・インドから欧州南部, 池・河畔の泥湿地に普通, 一VII-X-, 台湾では蓆草, 別名タイコウイといって, 大甲巣(むしろ)をつくる。三角イは茎の形による。

49. *S. tabernaemontani* Gmel. フトイ

C, 北海道・本州・四国・九州, 樺太・千島・朝鮮から欧州, 池沼の水辺に群生, 庭池に栽培し觀賞, 一VII-X-, 太イの意。

Commelinaceae ツユクサ科

50. *Commelina communis* Linn. ツユクサ 鴨跖草

A・B・C・D・E・G, 北海道・本州・四国・九州, 樺太・ウスリー・朝鮮・満州・中国, 平地・丘陵地の畑地や草原に最も普通, 一VI-IX-, 露草の意。着草(ツキクサ)は古名で, 花で布を刷り染めしたことによる。

51. *Aneilema keisak* Hassk. イボクサ

B, 本州・四国・九州・琉球, 中国, 水田や沼地の水湿地, 池畔に普通, 一IX-X-, この草をいばにつけると取れるによる。別名はイボトリグサ。

Pontederiaceae ミズアオイ科

52. *Monochoria vaginalis* (Burm. fil.) Presl. var. *plantaginea* (Roxb.) Solms-Laub.

コナギ, ササナギ, ミズナギ 鴨舌草

C, 本州・四国・九州・琉球, 台湾・中国・インド・マレーシア・朝鮮・満州, 池や水田に普通, —IX—X—, 小形のナギ(ミズアオイ)の意。

Liliaceae ユリ科

53. *Hemerocallis fulva* (Linn.) Linn. var. *Kwanso* Regel ヤブカンゾウ, オニカンゾウ
萱草

A・D, 北海道・本州・四国・九州, 平地や丘陵地に普通, —VII—VIII—, 萱草の本体は基本種の *H. fulva* Linn. ホンカンゾウ。

54. *Allium grayi* Regel ノビル 山蒜

F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 山野や堤に普通, —V—VI—, 野にあるヒル, ヒルはネギやニンニクの総称。

55. *A. sativum* Linn. forma *pekinense* Makino ニンニク 蒜

A(畑あと), 支那の原産, 畑に栽培, —VI—VII—, 銀茎を食用, とくに強壮薬として賞用, 忍辱(ニンニク)耐え忍ぶの意味, 占名オオビルは大形のネギの意。

56. *Lilium auratum* Lindl. ヤマユリ

B, 本州(中部以北)・北海道(帰化), 丘陵地や山地に自生, 人家に栽培, —VII—VIII—, 銀茎を食用, 山百合の意。

57. *Polygonatum odoratum* (Mill.) Druce var. *pluriflorum* (Miq.) Ohwi アマドコロ
萎蕤(イズイ)

A・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山地や原野, —IV—VI—, 甘ドコロは地下茎が少し甘味を持つもの意。

58. *Rohdea japonica* (Thunb.) Roth オモト 万年青

B・D (多数群生), 本州(東海道以西)・四国・九州, 中国, 暖地の林中に群生, 賞用として栽培, 品種が多い。—V—VI—, 大本(オオモト)の意。

59. *Liriope minor* (Maxim.) Makino ヒメヤブラン

D, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 中国, 平地や林中に群生, —VI—IX—, 姫ヤブランの意。

60. *Ophiopogon japonicus* (Linn. fil.) Ker-Gawl. ジャノヒゲ 書帯草

B, 北海道・本州・四国・九州, 山地の樹蔭, —VII—VIII—, 机上の上品な飾り物, 蛇のヒゲまたは龍のヒゲの意。

61. *Smilax riparia* A. DC. var. *ussuriensis* (Regel) Hara et T. Koyama シオデ 牛尾
菜

B, 北海道・本州・四国・九州, 满州・中国・ウスリー, 原野・山林の縁に生える, 一VII—
VIII—, 若い茎や葉を食用, シオデは北海道アイヌの方言シユウホンテによる。

62. *S. china* Linn. サルトリイバラ

B・E, 北海道・本州・四国・九州, 中国・朝鮮・インドシナ・フィリピン, 山地・丘陵地
の森林や原野, 一IV—, 根はパイプ, 根・茎は民間薬(和すなわち日本産の山奇根サンキライ),
葉は餅を包む, 猿捕りのイバラの意。

Amaryllidaceae ヒガンバナ科

63. *Lycoris squamigera* Maxim. ナツズイセン

A・D, 本州・四国・九州, 自生(中部以北山地), 庭園に栽培し花を觀賞, 一VII—IX—, 夏
水仙は葉がスイセンに似て, 夏花が咲くによる。

Dioscoreaceae ヤマイモ科

64. *Dioscorea batatas* Decne. ナガイモ 薯蕷(ショヨ), 山薯→野山薯(山に生えるも
の)・家山薯(田畠に栽培するもの)

A・D, 北海道・本州・四国・九州, 中国・朝鮮・台湾, 山野に生え, 田畠に栽培, 一VII—
IX—, 長芋は肉質根が長いの意。

Zingiberaceae ショウガ科

65. *Zingiber mioga* (Thunb.) Roscoe ミョウガ 薑荷

B, 本州・四国・九州, 热帶アジア原産, 樹蔭地, 栽植, 一VII—X—, 花序と若芽を食用,
古名メガ, メウガがのびてミョウガとなつた。

DICOTYLEDONEAE 双子葉植物

CHORIPETALAE 離弁花類

Salicaceae ヤナギ科

66. *Salix hondoensis* Koidz. ミチノクシロヤナギ

C, 北海道・本州, 一VI—VII—。

67. *S. bakko* Kimura バッコヤナギ, ヤマネコヤナギ
D・F, 北海道(西部)・本州(近畿以東), 山中陽地, —IV—V—, 木質表面に短い隆起線がある。
68. *S. vulpina* Anders. キツネヤナギ, イワヤナギ
D, 北海道・本州・四国・九州, 南千島, 山地, —IV—V—, 狐柳の意。
69. *S. integra* Thunb. イヌコリヤナギ
F, 本州・九州, 朝鮮, —III—VI—, 犬行李柳はコリヤナギに似ているが利用価値がないの意。

Juglandaceae クルミ科

70. *Juglans ailanthifolia* Carr. オニグルミ
B・F, 北海道・本州・四国・九州, 山野の流れに沿って生える, 各地に栽培, —V—, 小銃の台木, 種子は食用, 鬼グルミは核果の凹凸があって醜いの意。

Betulaceae カバノキ科

71. *Carpinus tschonoskii* Maxim. イヌシデ, シロシデ
F, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山地や平地に生える, —V—, 犬シデはひも状の花穂, 白シデは芽や新葉に白い毛が多いことによる。
72. *Alnus japonica* (Thunb.) Steud. ハンノキ
C, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・ウスリー・満州, 水湿ある低地に普通, —III—, 果実は染料, ハリノキの転化, ハリノキの語源は不明。

Fagaceae ブナ科

73. *Quercus serrata* Thunb. コナラ, ハハツ, ナラ 青岡樹
B・D・E, 北海道・本州・四国・九州, 丘陵地や山地に普通, 変化が多い, —IV—, 材は建築・土木・器具・薪炭用, 秋おそく黄葉または紅葉, 橋は俗用字。
74. *Q. aliena* Blume ナラガシワ
E, 本州(北陸地方・近畿以西)・四国・九州, 丘陵地・山地に生える, —IV—, コナラとカシワの間種の特徴を示す。
75. *Q. dentata* Thunb. カシワ, モチガシワ
E, 北海道・本州・四国・九州, 南千島・朝鮮・中国, 山地に生える, —V—, 樹皮は染料, 葉は餅を包む, 炊葉は食物を盛る葉の意。

76. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. クリ

B・D・E, 北海道(西南部)・本州・四国・九州, 中国・朝鮮, 山地に自生, 果樹として栽培, 一V-, 種子を食用, クリは黒実の意。漢名の栗は支那産 *C. bungeana* Blume アマグリを指す。

Ulmaceae ニレ科

77. *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ケヤキ

B・D・F, 本州・四国・九州, 中国, 平地や丘陵地, 栽植, 一IV-VI-, 建築・器具材料とし賞用, ケヤキは顕著な樹の意, 楓(俗字ツキ)ケヤキの古名 var. *Tsuki* Makino 材質はよくない。櫻はクルミ科の *Pterocarya stenoptera* DC. の漢名, 従って誤用。

78. *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* (Planch.) Nakai エノキ 朴樹(慣用)

A・B・D・E・G, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国(母種は中国南部), 平地・丘陵地にもっとも普通, 一IV-VI-, 果実は子どもが食べる。大木圓錐塔の大木は楓(えのき)との一説があるが, これは和字で夏に樹陰が好まれるので, 木に夏を配したもの, 漢字の楓は本種ではなく別の物である。しかし当史跡のシンボルの木とするに価値がある。シダレエノキ *form pendula* Makino 枝が垂れる, エゾエノキ *C. jessoensis* Koidz. (北海道・本州・四国・九州・朝鮮), コバノチョウセンエノキ *C. leveillei* Nakai (九州, 朝鮮), チュウゴクエノキ *C. leveillei* Nakai var. *holophylla* Nakai (九州, 中国)がある。

Moraceae クワ科

79. *Fatoua villosa* (Thunb.) Nakai クワクサ 水蛇麻

B・D, 本州・四国・九州・琉球, 中国, 低地の草地, 畑地・荒地に普通, 一IX-XI-, 桑草の意。

80. *Morus alba* Linn. トウグワ 桑

A・B, 中国・朝鮮の原産, 広く栽培, 品種極めて多い, 一IV-VI-, 果實を食用, 葉は養蚕の飼料。

81. *M. bombycina* Koidz. ヤマグワ, クワ

A・D・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・樺太・南千島, 山地に自生, 一IV-VI-, クワの語源。一説は食葉(クワ), 他は桑葉(コハ)の転化, 蚕の食う葉の意。

82. *Broussonetia papyrifera* (Linn.) Vent. カジノキ 楠・構・穀

B・D, 本州(中部地方南部以西)・四国・九州・琉球, 中国・台湾など南方暖地, 自生または栽培, 南方暖地より渡来, 一V-VI-, 枝の皮を和紙の原料, コウゾの古名カゾの転化か。

83. *B. kazinoki* Sieb. コウゾ

D, 本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・台湾・中国, 山地に自生, 栽植, —IV—V—, 和紙の原料, 紙麻(カミソ)の音便カウゾから, カウゾはカゾからみちびかれた。楮は横すなわちカジノキの通名。

84. *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. カナムグラ 葎草

A・B・D・G, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 中国・台湾, 原野・山林・路傍や荒地に最も普通, —IV—X—, 雌雄異株, カナは鉄の意, 茎が強いから, ムグラはほうぼうと茂る雑草の意。

85. *H. lupulus* Linn. var. *cordifolius* (Miq.) Maxim. カラハナソウ

B・C・D, 北海道・本州(関東地方・中部以北), 中国, 山地に群生, —VII—IX—, 雌雄異株, 唐花草は唐花は模様に使われる花形, つるの上についた果穂をたとえた。母種のセイヨウカラハナソウ *H. lupulus* Linn. は欧洲原産, ホップといってビールの苦味をつける。

Urticaceae イラクサ科

86. *Pilea hamaoi* Makino ミズ

A・G, 北海道・本州・四国・九州, 中国, 鰐沿い・溪流のふちなど山地や原野の陰湿地, —VII—X—, 茎葉を食用(山菜), 茎が半透明で軟くみずみずしているのでミズという。

87. *Boehmeria tricuspidata* (Hance) Makino アカゾ

A・B・D, 北海道・本州・四国・九州, 山地や原野の樹陰・畠あぜなどに群生, —VII—IX—, 赤麻の意。

88. *B. holosericea* Blume オニヤブマオ

B・D・F, 本州・四国・九州, 中国・インドシナ, 海岸近くの原野や低山の溪流, —VII—IX—, 鬼敷^{アマメ}麻はヤブマオより粗強の意。

Polygonaceae タデ科

89. *Rumex acetosella* Linn. ヒメスイバ

A, 北海道・本州・四国・九州, 欧州およびアジア原産, 日当たりよい草地や荒地に最も普通, —V—VII—, 鮮化植物(明治初年渡来), 雌雄異株, 姫酸葉の意。

90. *R. acetosa* Linh. スイバ 酸模・蕎

A, 北海道・本州・四国・九州, 北半球温帯一般, 低地または山地・草原・堤や畔など, —V—VI—, 雌雄異株, 酸い葉の意。

91. *R. japonicus* Houtt. ギシギシ 羊蹄

A・C・G, 北海道・本州・四国・九州, 樺太・朝鮮・カムチャッカ, 原野や路傍の湿地・水辺, —VI—VIII—, 根を薬用(シノネ, シはギシギシの古名), ギシギシは京都の方言, 意味不明。

92. *Polygonum filiforme* Thunb. ミズヒキ 毛蓼

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国・インドシナ, 林地や藪地, —VII—IX—, 水引は花穂をたとえた。

93. *P. aviculare* Linn. ミチャナギ, ニワヤナギ 薺蓄

A・F, 北海道・本州・四国・九州, 北半球温帯一般, 草地路傍にきわめて普通, —V—IX—, 变化が非常に多く, 種々な系統がある。追柳・庭柳は葉形が柳のようで道や庭に生えるの意。

94. *P. perfoliatum* Linn. イシミカワ, サデクサ 刺莖頭

A, 北海道・本州・九州, 朝鮮・中国・マレー・インド, 山地や原野に普通, —VII—IX—。

95. *P. senticosum* (Meisner) Franch. et Savat. ママコノシリヌグイ

A・B・D, 北海道・本州・四国・九州, 中国・朝鮮, 山地や原野に普通, —VI—IX—, 繼子の尻拭, 逆向きの刺のある茎で繼子の尻を拭うの意。

96. *P. thunbergii* Sieb. et Zucc. ミゾソバ, ウシノヒタイ

B・C, 北海道・本州・四国・九州, 中国・台湾・朝鮮・ウスリー, 低地や山地の水辺のある所に群生, 非常に変化がある。—VII—IX—, 潟に繁茂するソバの意, 葉形がソバの葉に, また牛の額(ヒタイ)に似ているによる。

97. *P. thunbergii* Sieb. et Zucc. var. *stoloniferum* Makino オオミゾソバ

C, 山地や原野の水辺, 全体に大形。

98. *P. sieboldii* Maxim. アキノウナギツカミ

B・C・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国・東シベリア, 山地や原野の温帯や樹陰, —VI—IX—, 茎に刺があるのでウナギがつかめるの意で, 秋花が咲く。

ウナギツカミ var. *aestivum* (Ohki) Ohwi 6~7月ごろ開花, 中間型が多い。

99. *P. japonicum* Meisn. シロバナサクラタデ

A, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮南部・中国, 水温のある草地, —VII—IX—, サクラタデに比べ花は白色小形。

100. *P. conspicuum* (Nakai) Nakai サクラタデ

A・B・D, 本州・四国・九州, 朝鮮, 水温のある向陽地, —VII—IX—, 雌雄異株。

101. *P. caespitosum* Blume var. *laxiflorum* Meisn. ハナタデ

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山地・草地の水温ある陰地, —VII—IX—,

生育状況によって花の色に濃淡あり、疎密も一様でない。牧野富太郎博士はヤブタデ *P. yosakuanum* Makino とした。

102. *P. longisetum* De Bruyn イヌタデ、アカノマンマ

C・D、北海道・本州・四国・九州、朝鮮・台湾・中国・マレーシア、畑地・田畔・草地や路傍に最も普通、—VII—IX—、大茎は辛味がなく食用にならぬタデの総称、アカノマンマは粒状の紅花を赤飯にたとえた。

103. *P. foliosum* H. Lindb. var. *paludicola* (Makino) Kitamu. ヤナギヌカボ

C、北海道・本州・四国・九州、朝鮮、丹種は欧洲からシベリア・満州、湿地や水辺群生、—IX—X—、葉がヤナギの葉に似たヌカボの意。

104. *P. erecto-minus* Makino ヒメタデ

C、北海道・本州・四国・九州、朝鮮・満州・中国、湿地や水辺に群生、—V—VI—。

105. *P. cuspidatum* Sieb. et Zucc. イタドリ 虎杖、黄菓子

A、北海道・本州・四国・九州、山野に普通、—VII—X—、痛み取りに薬効、イタドリ(採取)の説がある。

106. *P. sachaliense* Fr. Schm. オオイタドリ

A、北海道・本州(北・中部の日本海沿岸地方)、樺太・千島、山地の溪側に群生、—VII—IX—、イタドリより大形。

Chenopodiaceae アカザ科

107. *Chenopodium album* Linn. シロアカザ、シロザ 灰蘿

A・G、北海道・本州・四国・九州、ヨーロッパ原産、畑地・荒地に最も普通、—IX—X—、現在は雑草として世界各地に伝播、芽心・葉の下面白色を帯びる。

108. *C. ambrosioides* Linn. ケアリタソウ

G、本州・四国・九州(帰化)、中米原産、都市にて雑草化、—VII—IX—、茎葉に強い臭気がある。

Amaranthaceae ヒユ科

109. *Amaranthus lividus* Linn. イヌビュ 野苋

A、北海道・本州・九州、ヨーロッパ原産、世界に分布する雑草、畠や路傍に普通、—VI—X—、葉を食用、犬ビュの意。

110. *Achyranthes fauriei* L'ev. et Van. ヒナタイノコズチ 牛膝

A・B・C、本州・四国・九州、中国、路傍・藪地周辺、—VII—IX—、果穂は節の太い茎をイノコの脚の膝頭にたとえたもの、果実がとげをもち衣服や動物などに着いて運ばれる。

- Portulacaceae - スベリヒュ科

- 111 *Portulaca oleracea* Linn. スベリヒュ 馬齒莧

A・G, 北海道・本州・四国・九州, 全世界の温帯から熱帯に雜草として野生, 畑・路傍・庭園などの日向に普通, -VII-IX-, 茎葉を食用, 食べるとき粘滑なので滑りヒュの意。

Caryophyllaceae ナデシコ科

112. *Stellaria aquatica* (Linn.) Scop. ウシハコベ 鶴見脇

B・G, 北海道・本州・四国・九州, 北半球温帯・温帶および北アフリカ, 路傍・畠地などに普通, -IV-V-, 牛ハコベはハコベに比べて大形の意。

113. *S. media* (Linn.) Villars コハコベ 繁縷

A, 北海道・本州・四国・九州, 旧世界原産, 現在世界中に伝播, 路傍・山畠などの向陽地に最も普通, -III-IX-, 春の七草の一つ, 小鳥(カナリア)の餌, ハコベはハコベラの略。

114. *S. alsine* Grimm var. *undulata* (Thunb.) Ohwi ノミノスマ 天蓬草

C, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 北半球温帯一般, 山地・平地の田畠など普通, -IV-X-, 蛋の糞は小形の葉をノミの夜具にたとえた。

115. *Cucubalus baccifer* Linn. var. *japonicus* Miq. ナンバンハコベ, ツルセンノウ

D・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・南千島・樟太, 種としては欧州・ヒマラヤ・台湾, 山野に群生, -VII-X-, 南蛮ハコベは海外から渡来したハコベを意味するが, 実は誤認, 茎センノウはつる性で同類のセンノウに似ている。

116. *Melandryum firmum* (Sieb. et Zucc.) Rohrb. フシグロ

E, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・東シベリア, 原野や山地, -VI-IX-, 节黒は節が暗紫色。

Ranunculaceae キンボウゲ科

117. *Clematis apifolia* DC. ポタンヅル

A・B・D, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山野藪地に群生, -VII-IX-, 牡丹莧は葉がポタンの葉のようでつる性の意。

118. *C. terniflora* DC. センニンソウ

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山野・路傍など向陽地, -VII-X-, 有毒植物, 仙人草の意。

119. *Thalictrum aquilegifolium* Linn. カラマツソウ

A・B・D, 北海道・本州・四国・九州, 欧亜大陸の北温帯および亜寒帯, 山地・高原に多

い、—Ⅷ—Ⅸ—、唐松草は花のようすによる。

Lardizabalaceae アケビ科

120. *Akebia quinata* (Thunb.) Decaisne アケビ、アケビカズラ 野木瓜・木通

A・B・D、本州・四国・九州、朝鮮・中国、山野の叢林、—Ⅳ—Ⅴ—、五小葉からなる掌状複葉、果肉は食用、莖は編細工、アケビは果実の開く意、植物を指すときはアケビカズラ。

121. *A. trifoliata* (Thunb.) Koidz. ミツバアケビ

D・E、北海道・本州・四国・九州、中国、山野の叢林、—Ⅳ—Ⅴ—、三小葉の掌状複葉、三葉アケビの意、果実は食用、果皮は味増漬、莖はアケビ細工。

Berberidaceae メギ科

122. *Berberis amurensis* Rupr. var. *japonica* (Regel) Rehd. ヒロハノヘビノボラズ

B、北海道・本州・四国・九州、母種は朝鮮・満州・アムール、山地叢林に生える、—Ⅵ—、広葉蛇上らずの意。

Magnoliaceae モクレン科

123. *Magnolia obovata* Thunberg ホオノキ 厚朴・商州厚朴

B、北海道・本州・四国・九州(日本特産)、中國、山地林地、—Ⅴ—Ⅵ—、材は刀の鞘・下駄・器具・版木など、葉は食物を包む。古名ホオガシワは昔この葉に食物を盛ったのによる。

Lauraceae クスノキ科

124. *Lindera umbellata* Thunb. var. *membranacea* (Maxim.) Momiyama オオバクロモジ

B・D、北海道・本州、山地林中、—Ⅳ—、樹皮の油は香水の原料、材は上等な爪楊子に使う。人葉黒文字は樹皮の黒色の斑点を文字になぞらえた。

125. *Neolitsea sericea* (Blume) Koidz. シロダモ、シロタブ

B・D、本州・四国・九州、朝鮮・台湾・中国、山地や平地の林中(暖地性常緑樹)、—Ⅸ—Ⅹ—、白ダモは葉の裏が白いのによる。

Papaveraceae ケシ科

126. *Chelidonium majus* Linn. var. *asiaticum* (Hara) Ohwi クサソウウ 白屈菜

A・B・D、北海道・本州・四国・九州、東亜温帯、母種は歐州・アジア西部の温帯、低地の路傍・林縁・石垣など陽地に普通、—Ⅴ—Ⅶ—、有毒植物、薬用(丹毒)、草の黄の意で、黄色の汁を出すによる。

Cruciferae アブラナ科

127. *Rorippa indica* (Linn.) Hochr. イヌガラシ 草薙

C, 北海道・本州・四国・九州・琉球、台湾・中国・朝鮮・インド、原野・道ばた・庭園などやや湿地に普通、—V—IX—。大芥は雑草で食用にならない意、藥用（中国では甜夢薙・苦夢薙がある）。

Crassulaceae ベンケイソウ科

128. *Sedum lineare* Thunb. オノマンネングサ タカノツメ 佛甲草

A, 本州・四国・九州・琉球、低山地・草地、觀賞用として人家の庭に植える、—V—VI—。雄の万年草、雌の万年草に対する名で、より大きくななか枯れないで永く生育するによる。鷹の爪は鋭く尖った葉による。

Saxifragaceae ユキノシタ科

129. *Hydrangea paniculata* Sieb. ノリウツギ

D, 北海道・本州・四国・九州、中国・樺太・南千島、山地に普通、変化が甚が多い。—IV—IX—。幹の内皮から製紙用（和紙）の糊をとる。根はパイプ（さびたパイプ）をつくる。

130. *Deutzia crenata* Sieb. et Zucc. ウツギ、ウノハナ

A・B・G, 北海道・本州・四国・九州、中国、山地に普通、東北地方では畠畔に栽培、境界の目印用、—V—VI—、材で木釘をつくる。空木の意、別に卯月（陰暦4月）に花をつけることによる。

Rosaceae バラ科

131. *Stephanandra incisa* (Thunb.) Zabel コブメウツギ

B, 北海道（口高）・本州・四国・九州、朝鮮、低山地に普通、—V—VI—、小米空木の意で、小さい白花を小米（碎けた米粒）にたとえた。

132. *Duchesnea chrysanthia* (Zoll. et Mor.) Miq. ヘビイチゴ 蛇苺

A・B・C・G, 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・満州・中国・マレーシア・インド、低地草原・田畠など向陽地に普通、—IV—VI—、蛇苺は人間が食べないで蛇が食うの意、俗説は有毒といわれるが無毒、美味でない。

133. *Rubus microphyllus* Linn. fil. ニガイチゴ

B, 本州・四国・九州、中国、山地灌木林周縁に普通、—IV—V—、苦苺は核果は赤熟、液汁は甘いが核は苦い。5月に熟す五月苺という。

134. *R. palmatus* Thunb. var. *coptophyllus* (A. Gray) Koidz. モミジイチゴ, キイチゴ

B・G, 本州(北部・中部地方), 山野に普通, —VI—V—, モミジ苺は葉形がカエデの葉に似ている。木苺および黄苺は木本性で果実が黄熟するに因る。核果は美味。

135. *R. parvifolius* Linn. ナワシロイチゴ, サツキイチゴ 紅梅消

A・B・G, 北海道・本州・四国・九州, 中國・台灣, 平地・丘陵地に最も普通, —V—VI—, 苗代苺は6月の苗代のころ実が熟すの意, 皐月苺は陰暦5月に熟すから, 核果は深赤色で美味。

136. *Sanguisorba officinalis* Linn. ワレモコウ 地榆

E・G, 北海道・本州・九州, 歐州・シベリア・中国・朝鮮, 山地草原にやや普通, —VII—X—, 吾木香の意, 木香(キク科植物)古くから日本の木香の意味でワレモコウの名があった。これが名だけ本種にうつったか, それとも間違えたものか不詳。

137. *Agrimonia pilosa* Ledeb. キンミズヒキ 龍牙草

A・B・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中國・東欧～シベリア, 草地・路傍に普通—VII—X—, 金水引の意で, 細長い黄色の花穂をミズヒキ(タデ科植物)にたとえたもの。

138. *Rosa multiflora* Thunb. ノイバラ 野薔薇

A・B・D, 北海道・本州・四国・九州, 原野・河岸など, —V—VI—, 假果は嘗実(漢名)といい薬用, 野外に生えるバラの意で, 元来トゲのある低木をイバラと総称, 薔薇をイバラという。

139. *Prunus mume* Sieb. et Zucc. ウメ 梅

A・B・G, 九州(大分県山間谷川沿い)に野生, 中国原産, 古代日本に渡来, 広く栽培, —II—IV—, 果実を食用, 品種多く觀賞用, ウメの語源 一つは烏梅, 薫べ梅のことで乾燥品を薬用にするもの, 梅の漢音 mui または mei の転訛, もう一つは朝鮮語のマイに由来するという説がある。

140. *P. persica* (Linn.) Batsch. モモ 桃

A, 九州などに野生, 中国原産, 古く日本に渡来, 品種多く広く栽培, —IV—V—, 果実は夏の重要な果物, 葉は薬用, 花や樹形は変化が多く觀賞用, 日本では丸くて中の固いものをモモといい, ヤマモモ(ヤマモモ科)をモモといった。このモモを本種が大陸から渡来してとて変わったという。

141. *P. grayana* Maxim. ウワミズザクラ

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 山地や丘陵地林内, —IV—VI—, 核果ははじめ黄熟し後に黒くなる。未熟で緑色のものを塩漬にして食用, ウワミズザクラ(上溝桜)の転訛したもの, 皆龜甲で占った時, この材の上面に溝を彫って使ったので上溝といった。紅葉が美しい。

Leguminosae マメ科

142. *Albizia julibrissin* Durazz. ネムノキ 合歓・夜合樹

A・F・G, 本州・四国・九州, イラン～南アジア一般, 河岸や山野に普通, —VI—VII—, ネムノキは小葉が夜間に閉じる(睡臥運動)による。

143. *Gleditsia japonica* Miq. サイカチ

E, 本州(中・南部)・四国・九州, 山地林中, —V—VI—, 新葉を食用, 豆果は石鹼の代用, 古名 西海子(サイカイシ)の転訛したもので, サイカイシまたはサイカイジュという。

144. *Trifolium repens* Linn. シロツメクサ, ツメクサ, オランダゲンゲ, クローバー

A・B・D, 江戸時代日本に渡来, 現在野生化(帰化植物), 歐州原産, —VI—VII—, 牧草・綠肥, 和蘭ゲンゲ, 諂め草, 現在は白詫草という。昔和蘭人がガラス(ぎやまん)器具を箱に入れ, 本種の枯草を詰めて長崎港に運んできたことに因る。

145. *Lespedeza cyrtobotrya* Miq. マルバハギ, ミヤマハギ

E・F, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山野の向陽地, —VIII—IX—, 円葉萩の意。

146. *L. cuneata* (Du Mont d. Cours.) G. Don メドハギ 鉄掃箒

A・F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・台湾・インドおよびオーストラリア, 原野・山地の向陽地, —VII—IX—, 目処萩の意味で, 篋(メドギ)萩が省略されたもの。

147. *L. pilosa* (Thunb.) Sieb. et Zucc. ネコハギ, 鐵馬鞭

F, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 日当りよい草地や畑地, —VII—IX—, 猫萩は全株に毛が多く生えているため。

148. *Kummerovia striata* (Thunb.) Schindler ヤハズソウ 鶴臘草

B・F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・満州・中国・台湾, 北米に帰化, 原野路傍に普通, —VII—IX—, 牧草(日本では実用化されていないが, 外国では japan clover と呼ばれ利用されている)矢管草は葉を指先で引っぱると, 矢管状に切れることによる。

149. *Desmodium oxyphyllum* DC. ヌスピトハギ 山馬鈴

D, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・台湾・中国・北インド, 林地や半陰の草地, —VII—IX—, 豆果は短い鉤形毛があって, 衣服などにつき種子を散布する。盗人萩は豆果の形が盜棒の足跡に似ているに因る。

150. *D. fallax* Schindl. ヤブハギ

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・ウスリー・中国, 低地の林地や半陰の草地, —VII—IX—, 盗萩の意。

151. *Vicia cracca* Linn. クサフジ

A・B・D, 北海道・本州・九州, 北半球の温帯・亜寒帯, 山野に普通, —V—VII—, 牧草

(日本では利用されていない), 草藤の意味, 花と草全体がフジに似ているに因る。

152. *Dumasia truncata* Sieb. et Zucc. ノササゲ, キツネササゲ

B, 本州・九州, 山地林縁や藪林, 一V—IX—, 狐豇豆, 野豇豆の意味, 原野には生えない。

153. *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi クズ 蔓

B・D・E・F・G, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山野に普通大群落, 一V—IX—, 根 肥大して薬用, 蔓粉をとる。葉には牛馬の飼料, クズはクズカズラの略称, 一説に昔奈良県国柄(クズ)の人が蔓粉をとって, 売りにきたので, クズというようになった。

154. *Indigofera pseudo-tinctoria* Matsum. コマツナギ 馬蘇

E・F, 本州(中部以西)・九州, 中国, 原野に最も普通, 一V—IX—, 駒糞は茎が丈夫で馬をつなぐことができるの意。

155. I. *decora* Lindl. ニワフジ, イワフジ

E, 本州(近畿南部)・四国・九州, 溪流の岩上, 平地の人家の石垣に栽培, あるいは野生状, 一V—VI—, 庭藤または岩藤の意。

156. *Amphicarpea edgeworthii* Benth. var. *trisperma* (Miq.) Ohwi ウスバヤブマメ

A, 北海道・本州(中部以東)・九州(まれ), 朝鮮・満州・ウスリー, 草地・林縁に普通, 一IX—XI—, 薄葉藪豆の意。

157. *Wisteria floribunda* (Willd.) DC. フジ 紫藤

B・D・E・F, 本州・四国・九州, 山地に自生大繁茂, 庭園に栽培, 花色に変化が多い。フジは吹き散るの意。漢名の紫藤は中国産のシナフジ *W. sinensis* Sweet. である。

Geraniaceae フウロウソウ科

158. *Geranium thunbergii* Sieb. et Zucc. ゲンノショウコ, ミコシグサ

A・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 平地に普通, 一V—IX—, 葉草で葉を乾かし煎じて飲む, 下痢止めとして有名, 現の証拠は飲むとすぐ効果が現われることに因る。果実が裂開してみこしの屋根に似るので, 別名ミコシグサ。

Oxalidaceae カタバミ科

159. *Oxalis corniculata* Linn. カタバミ, スイモノグサ 酢葉草

A, 北海道・本州・四国・九州, 世界の暖帯および熱帯, 平地・草原・路傍に普通, 変化が多い。一V—IX—, 傍食は葉の一側が欠けている意味, 酢物草は酸味があるによる。アカカタバミは茎葉が赤紫色, ウスアカカタバミは茎葉が緑紫色のものをいう。

Rutaceae ミカン科

160. *Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC. サンショウ 薄椒

A・B・D・E, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国, 山地に自生, 変異多く栽培,
- IV-V-, 若い葉を食用, 果実を薬用や香料, 山椒の意で, 古名ハジカミはハジカミラの
略, ハジははぜる, カミラはニラの古名, すなわち果皮が開裂し, 味がからくニラに似ている
による。

Euphorbiaceae トウダイグサ科

161. *Acalypha australis* Linn. エノキグサ, アミガサソウ 人莧・鐵莧・海蚌含珠

A・B・D・E, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・ウスター・中国・フィリピン, 平
地路傍・畠地に普通, - VII-IX -, 檻草は葉がエノキの葉に似ている。編笠草は包葉が編笠に
似ているによる。

162. *Euphorbia pekinensis* Rupr. タカトウダイ

E・F, 本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国, 山地・丘陵地に生え変化が多い, - VI-VII-,
有毒植物, 丈の高いトウダイグサの意。

Coriariaceae ドクツギ科

163. *Coriaria japonica* A. Gray ドクツギ, イチロベヅロシ

E・F・G, 北海道・本州(近畿以東), 河畔, 山地や丘陵地の斜面に生える, - V-, 有毒植物,
青空木はウツギ(ユキノシタ科)に似ていて有毒のため, 市郎兵衛殺し, 果実は多汁, 初
め赤色, 熟して紫黒色となる, 調って食べると猛毒のため死ぬ。

Anacardiaceae ウルシ科

164. *Rhus ambigua* Lavallée, ex Dippel ツタウルシ 鈎吻・野萬

B, 北海道・本州・四国・九州, 中国・韓国・南千島, 山林中に生える, - V-VI -, ツタ
漆は蔓性のウルシの意。

165. *R. trichocarpa* Miq. ヤマウルシ

D, 北海道・本州・四国・九州, 千島(南部)・朝鮮・中国, 丘陵や山地に普通, 山漆は山
地に生えるウルシの意。

166. *R. javanica* Linn. スルデ, フシノキ 跳躑子

B・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・満州・中国・インド, 山地や丘陵
地に普通, - VII-IX -, 木から汁液をとり物に塗るのでスルデ, 葉にスルデノフシムシが寄生し

五倍子を生じ、これをフシといい、それ故フシノキという。

Celastraceae ニシキギ科

167. *Celastrus orbiculatus* Thunb. ツルウメモドキ

A・E, 北海道・本州・四国・九州, 山地・丘陵地に普通, しばしば栽培, —V—VI—, 蔓性ウメモドキに似た木の意, 牛花用。

168. *Euonymus alatus* (Thunb.) Sieb. ニシキギ, ヤハズニシキ 衛矛・鬼箭

A・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・樺太・南千島, 山地に普通, 多数の品種があって栽培, —V—VI—, 錦木は秋の紅葉が美しいので錦にたとえた。矢筈錦木は枝にコルク質の翼を矢筈にたとえた。果実は毛ジラミを殺すのに使うのでシラミコロシともいう。

169. *E. fortunei* (Turez.) Hand.-Mazz. var. *radicans* (Sieb., ex Miq.) Rehd. ツルマサキ 扶芳藤

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮, 山地に生え変異多く栽培, —VI—VII—, 蔓状のマサキの意。

170. *E. oxyphyllus* Miq. ツリバナ

B・D, 北海道・本州・四国・九州, 南千島・朝鮮・中国, 山地に普通, —V—VI—, 果実はアタマジラミの驅除薬, 吊花の意, 花や果実が垂れ下っているによる。

171. *E. planipes* (Koehne) Koehne オオツリバナ

D, 北海道・本州(中部以東), 朝鮮・満州・南千島, 山地に生える, —V—VI—, 大きい吊花の意で葉が大形。

Aceraceae カエデ科

172. *Acer palmatum* Thunb. var. *matusumurae* (Koidz.) Makino ヤマモミジ

B, 北海道・本州・四国・九州, 山地に生え, 変異が多く園芸品種も多い。—V—, 山モミジの意味, 秋の紅葉が美しい。

Vitaceae ブドウ科

173. *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* (Regel.) Nakai エビヅル 葡萄

A・B・D, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国・台湾, 丘陵地・山地に普通, —VI—VII—, 果実は黒熟し食用, 若い茎と葉はうす赤紫色の色が美しい, この色をエビの色に見立て, エビヅル, 古くはエビカズラといった。

174. *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. ノブドウ, ザトウエビ 蛇葡萄・野葡萄

A・B・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 中国・満州・朝鮮・ウスリー, 山野に普通, —VII—VIII, 野ブドウ, 座頭は盲人の目玉に似た実をつけるエビヅルの意。

175. *Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. et Zucc.) Planch. ツタ, ナツツタ 常春藤

B, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中國, 山野に普通, 薙芸品多く栽培, —VI—VII—, 平安時代, 早春この幹から液をとり, 煮つめて甘味料とした。アマズル・アマズラ (甘い液でつるの意), 葉は秋に紅葉し, ツタモミジという。ツタは伝うの意。

Actinidiaceae マタタビ科

176. *Actinidia arguta* (Sieb. et Zucc.) Planch., ex Miq. サルナシ, シラクチズル

B, 北海道・本州・四国・九州, 山地に生える。—V—VII—, 渡果食べられる。猿梨はサルが食べるナシの意, シラクチズルはマシラ(猿)口蔓の転訛したもの。

Violaceae スミレ科

177. *Viola grypoceras* A. Gray タチツボスミレ

A, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 平地や山地に普通, 変化が多い, —IV—V—, 花は淡紫色, 芳香がない。

178. *V. verecunda* A. Gray ツボスミレ, ニヨイスマリ 如意草

B, 北海道・本州・四国・九州, 平地および丘陵地の湿気ある草地に最も普通, —IV—V—, ツボスミレは庭に生えるスミレの総称, 如意スミレは如意は僧侶がもつ仏具の一つ, その形と葉形が類似するに因る。

Onagraceae アカバナ科

179. *Circaeaa mollis* Sieb. et Zucc. ミズタマソウ

B, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中國・インドシナ, 山林の日陰に多い, —VII—IX—, 水苔草は白い毛のある球形の果実を水長にたとえた。

180. *Oenothera lamarckiana* Ser. オオマツヨイグサ

A・B・F, 北米原産, 明治初年(1870ごろ)渡来, 各地に野生化(帰化植物), —VI—IX—, De Vries の突然変異説の材料となったもの, 大形黄色花で夕方開花する。

181. *Epilobium pyrrhophyllum* Franch. et Savat. var. *pyrrhophyllum* アカバナ

C, 北海道(渡島)・本州・四国・九州, 朝鮮・中國, 田畔・溪畔の水湿地に普通, —VII—IX—, 赤花は夏秋のころ葉が紅紫色になるによる。

Haloragaceae アリノトウグサ科

182. *Haloragis micrantha* (Thunb.) R. Br. アリノトウグサ 小二仙草

F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 台湾・中国・マレーシア・オーストラリア, 山野の草地に生える, —VII—IX—, 蟻の塔草はこの植物をアリ塚, 細かい花をアリにたとえた。

Araliaceae ウコギ科

183. *Aralia elata* (Miq.) Seemann タラノキ

A・B・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・樟太・アムール・ウスリー, 山野に普通, —VII—, 若い芽を食用 (タラの芽・タラッポ), ウドのような香味がある。

184. *A. cordata* Thunb. ウド

D・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国・樟太, 山野に自生, 栽培, —VII—, 若い芽を食用, 香りよく美味, 栽培のときはもやしにして食用。

185. *Hedera rhombea* (Miq.) Bean キヅタ, フユヅタ 百脚蜈蚣

B・D, 本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・台湾, 山林に普通, —X—XI—, ツタ (ブドウ科) に似るが木質の度が強い木ヅタ, 常緑のため冬ツタ。

186. *Acanthopanax sieboldianus* Makino. ウコギ, ヒメウコギ 五加

A・B・D・F, 支那原産, 薬用植物として渡来栽培, —V—VI—, 若い葉を食用, 根の皮 (五加皮) を薬用, 五加 (支那発音) に木を合せたもの, 古名ムコギ。

Umbelliferae セリ科

187. *Hydrocotyle ranunculoides* Maxim. オオチドメ

C, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮, 半陰湿地に群生, —IV—IX—, 葉をすりつぶし止血薬 (チドメグサ) とする。チドメグサヨリ大形の意。

188. *Torilis scabra* (Thunb.) DC. オヤブジラミ

A・D, 本州・四国・九州, 南鮮・台湾・中国, 平地の草地や藪周辺に群生, —V—VII—, 雄蕊ジラミは果実は粗大, シラミのようで衣服について散布される。

189. *Cryptotaenia japonica* Hassk. ミツバ

B, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・南千島, 丘陵地・山地林内に生える, —VI—VII—, 新苗においてあり食用, 三葉は3小葉からなるの意。

190. *Oenanthe javanica* (Blume) DC. セリ 水新

C, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 中国・台湾・マレーシア・インド・クイーンズランド, 低湿地・水田などに普通, —VII—VIII—, 葉に香りがあって食用, しばしば栽培, 新苗がせり (競)

合って出るの意。

191. *Angelica decursiva* (Miq.) Franch. et Savat. ノダケ 土当帰

B, 本州(関東以西)・四国・九州, 朝鮮・満州・中国, 丘陵地の林内・草地に普通, —XⅠ—, かぜ薬として煎じて飲む。漢名の音読みの転訛。

Cornaceae ミズキ科

192. *Cornus controversa* Hemsley ミズキ, クルマミズキ 燐台木

B・D・G, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 山地に普通, —V—IV—, 水木 樹液が多く, 春先に枝を折ると水がしたたる。車木は小枝の分岐状態を車輪にたとえた。防風・防火林として栽培。

GAMOPETALAE 合弁花類

Pyrolaceae イチヤクソウ科

193. *Pyrola japonica* Klenze イチヤクソウ 鹿蹄草

A, 北海道・本州・四国・九州, 丘陵地・山地の林下, —VI—VII—, 一葉草の意。

Myrsinaceae ヤブコウジ科

194. *Ardisia japonica* (Thunb.) Blume ヤブコウジ 紫金牛

B・D, 北海道(奥尻島)・本州・四国・九州, 朝鮮・中国・台湾, 丘陵地林内に普通, —VII—VIII—, 冬枯れに赤い果実が美しい。

Ebenaceae カキノキ科

195. *Diospyros kaki* Thunb. カキノキ 柿

B, 本州・四国・九州, 広く栽培, 品種が多い。—VI—, 果実(甘柿・渋柿)は食用, 若い果実は渋をとる。材は堅く器具材。

Styracaceae エゴノキ科

196. *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. エゴノキ, ロクロギ

B・D, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・台湾・フィリピン(北部), 山地・丘陵地に生える, —V—VI—, 材は傘のろくろに使用するのでロクロギ, 果皮はのどを刺激してひどいのでエゴノキ, 生の果皮はすり潰して川に流し魚を麻ひさせて捕る。

Oleaceae モクセイ科

197. *Ligustrum obtusifolium* Sieb. et Zucc. イボタノキ

D, 北海道・本州・四国・九州, 丘陵地の林内に最も普通, 変化が多い, 一VI-VII, 樹皮に, 白いイボタロウ虫が寄生するのでこの名がある。その虫が分泌したろうは家具のつや出しに使う。

Asclepiadaceae ガガイモ科

198. *Metaplexis japonica* (Thunb.) Makino ガガイモ, クサパンヤ 蘿藦

A, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国・千島(南部), 日当たりのよい原野・山地に生える, 一V-VI, 種子は扁平で白色絹糸状の毛を持ち, 風にのって飛ぶ。綿の代用として針さしや印肉に用いられる。クサパンヤの名もある。

Convolvulaceae ヒルガオ科

199. *Calystegia japonica* Choisy ヒルガオ 施花・鼓子花

A・B・C・D, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 原野路傍に普通, 一VII-VIII, 淡紅色の花を日中に開くの意。

200. *Cuscuta japonica* Choisy ネナシカズラ 金鏡藤・毛芽藤

B(杉山東山麓, クズに寄生人群生), 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・満州・中国, 山野でマメ科植物に寄生, 一VII-X。

Verbenaceae クマツヅラ科

201. *Callicarpa japonica* Thunb. ムラサキシキブ 紫珠

A・B・D, 北海道(南部)・本州・四国・九州・琉球, 满州・中国・台湾, 山地丘陵に生え, 其多型, 一VI-VII, 優雅な紫色の果実を紫式部の名で美化した。

Labiateae シソ科

202. *Glechoma hederacea* Linn. var. *grandis* (A. Gray) Kudo カキドオシ 馬蹄草

A・B・C・D・E, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・ウスリー・アムール・中国・台湾, 原種は北半球旧世界温帯一般に広く分布, 路傍・藪地に群生, 一IV-VI, 篠通でつるをのばして支柱をくぐり抜けるの意。

203. *Stachys japonica* Miq. var. *intermedia* (Kudo) Ohwi イヌゴマ, チヨロギダマシ

水蘇

C, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・満州・中国・台湾, 低地水辺, 一VII-VIII,

大胡麻 果実の形がゴマに似ているが、利用の価値がない。淡紅色唇形花。

204. *Mosla punctulata* (J. F. Gmel.) Nakai イヌコウジユ 石薺草

F, 北海道・本州・四国・九州・琉球、朝鮮・満州・中国・台湾、山地原野、—IX—X—。

205. *Clinopodium chinense* (Benth.) O. Kuntze var. *parviflorum* (Kudo) Hara クルマバナ

A・B・C, 北海道・本州・四国・九州、南千島・朝鮮・中国、丘陵地や山地・原野、—VII—IX—、車花は花の輪生する様子。

206. *Plectranthus inflexus* (Thunb.) Vahl, ex Benth. ヤマハッカ

E, 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・満州、丘陵・山地の林内、—IX—X—、山薄荷の意、香氣はない。

Solanaceae ナス科

207. *Lycium chinense* Mill. クコ 枸杞

A, 本州・四国・九州・琉球、朝鮮・満州・中国・台湾、低地、川の土手や溝の縁に普通、—VII—IX—、若葉はひたし物、飯に混ぜてクコ飯、果実は酒にひたして枸杞酒をつくり強壮薬とする。

208. *Physalis alkekengi* Linn. var. *franchetii* (Masters) Hort. ホオズキ 酸漿

A, 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・満州・中国(北部), 母種は中・南欧から小アジア・中東アジア、山地・原野あるいは栽培、—VI—VIII—、果実は子どもの玩具、地下茎は乾かして酸漿根と呼び薬用、葉に方言でホオと呼ぶカメムシ類がよくつくるのでホオズキと呼ぶ。古名カガチ。

209. *Solanum nigrum* Linn. イヌホオズキ 龍葵

B・F, 北海道・本州・四国・九州、南北両半球の熱帯から温帯、山地・原野、—VII—X—、有毒植物、液果は熟すと黒熟、漢方薬。

Scrophulariaceae ゴマノハグサ科

210. *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. キリ

A・B・F, 九州(野生状態)、広く栽培、露陵島(朝鮮 野生状態)、原産地は不詳、—V—VI—、切れぼすみやかに芽を出して、生長が早いのでキリの名がある。

211. *Scrophularia kakudensis* Franch. オオヒナノウツボ

B, 北海道・本州・四国・九州、朝鮮、低山地林中、—VII—X—、大きい鐘の臼壺の意で花の形による。

Plantaginaceae オオバコ科

212. *Plantago asiatica* Linn. オオバコ 車前

A, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 千島・樺太・東シベリア・台湾・中国・マレーシア
山地や低草地に最も普通な雑草, —IV—IX—, 大葉子の意で, 広い葉に因んだ。

Rubiaceae アカネ科

213. *Hedyotis diffusa* Willd. フタバムグラ

C, 本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・台湾・熱帯アジア, 平地や畠地, —IX—X—,
双葉ムグラの意。

214. *Paederia scandens* (Lour.) Merrill var. *mairei* (Leveille) Hara ヘクソカズラ,
ヤイトバナ 牛皮凍

A・B・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・台湾・フィリピン,
藪地・草地に生え変化が多い, —VII—IX—, 屁臭豆または屁臭サカズラは全体に悪臭があるから,
古名 クソガゾラ, ヤイトバナは花の中央がお灸のあとに似ているに由る。

215. *Rubia akane* Nakai アカネ 茜草

A・B・D, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国・台湾, 丘陵地や垣根, —VII—X—, 根は染料
として茜染, 利尿・止血・解熱・強壮剤, 染めた色が太陽の出る前の東の空の色に似ていので
アカネ, 古くは東の枕言葉“茜さす”が使われた。

216. *Galium verum* Linn. var. *asiaticum* Nakai キバナカラマツバ

A・B・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮, 乾いた日当りよい山地草原, 変化が多い。
—VI—IX—, 黄色花の河原松葉は河原に生え葉が松葉に見える意。

Caprifoliaceae スイカズラ科

217. *Sambucus sieboldiana* Blume, ex Graebn. ニワトコ 接骨木

A・B・D・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国, 山野に普通, 変化甚だ多い,
—IV—, 葉は民間薬, 鮎は太く軟かいので, 顕微鏡の切片をかみそりで切るときの支えとする。
死人の杖とし, 網針をつくる。(七ヶ浜)

218. *Viburnum dilatatum* Thunb. ガマズミ 蔓莢

B・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国, 丘陵地や山地, また人家に栽培,
—V—VI—, 果実(赤い)漬物の色つけ, スミは染の転流で, 古くは衣類をすり染めした。秋
の木の実として美しく, 小鳥が好む。

219. *Weigela hortensis* (Sieb. et Zucc.) K. Koch タニウツギ

D, 北海道・本州, 山地谷間に多い, 賞賞用として栽培, —V—VI—, 谷ウツギの意。

220. *Lonicera japonica* Thunb. スイカズラ, ニンドウ 忍冬

A・B・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国, 丘陵地・山地に普通, —V—VI—, 茎葉を薬用, スイカズラ 花に蜜があり, これを吸う時の唇の形に花冠が似ているによる。葉や花をお茶の代用(忍冬茶)とする。忍冬は冬でも枯れないで緑葉をもつによる。

Cucurbitaceae ウリ科

221. *Tricosanthes kirilowii* Maxim. var. *japonica* (Miq.) Kitamura キカラスウリ

A・B・D・E・F, 北海道(奥尻島)・本州・四国・九州・琉球, 母種は朝鮮・中国・インドシナ, 漢名 折腰, 山野に自生, —VII—IX—, 块根から澱粉(天瓜粉), 根の皮層(瓜呂根)を薬用とする。黄カラスウリは果実が黄いの意。

222. *Melothria japonica* (Thunb.) Maxim. スズメウリ

A・B・C・D, 本州・四国・九州, 朝鮮(済州島), 蔦地・原野・水田に普通, —VII—IX—, 瓜瓜 小型の果実をスズメで表現, あるいは瓜をスズメの卵に見立てた。

223. *Gynostemma pentaphyllum* (Thunb.) Makino アマチャヅル 紋股葛

B・E, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国・インド・マレーシア, 山地や藪地に多い, —VII—IX—, 葉に甘味があるので名づける。特に利用されない。

Campanulaceae キキョウ科

224. *Adenophora triphylla* (Thunb.) A. DC. var. *japonica* (Regel) Hara ツリガネニンジン

F, 北海道・本州・四国・九州, 樺太・南千島・台湾・中国, 山地や原野, 変化が多い, —IX—X—。

Compositae キク科

225. *Gnaphalium hypoleucum* DC. アキノハコグサ 秋鼠麿草

A・E・F, 本州・四国・九州, 朝鮮・中国・台湾・インド・フィリピン, やや乾燥した山野, —IX—X—, 秋咲くホオコグサの意。母子草は正しくない。茎の白毛や頭花の冠毛がほだけ立っていることから名づけたもの。

226. *Inula britannica* Linn. var. *chinensis* (Rupr.) Regel オグルマ 旋覆花

A, 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・満州・中国, 湿った平地や河岸, —VII—X—, 小車の意で端正な頭状花序の放射状舌状花を小さい車になぞらえた。

227. *Carpesium abrotanoides* Linn. ヤブタバコ 犬名精

B, 北海道・本州・四国・九州・朝鮮・中国・インド・コーカサス・南ヨーロッパ, 林地や藪地に生える。—IX-XI-, 葉の汁ははれや打傷に, 根や種子も薬用, 一種の臭氣がある。藪地に生え, タバコに似た葉をもつもの。

228. *Eupatorium lindleyanum* DC. サワヒヨドリ

A・E・F, 北海道・本州・九州・琉球, 台湾・朝鮮・満州・中国・フィリピン, 山地の日当りよい草地や乾地, —VII-X-, ヒヨドリバナに似て湿地に生えるによる。

229. *Kalimeris pinnatifida* (Maxim.) Kitam. ユウガギク

A (細あとに大群生)・E・F, 本州(近畿以北), 日当りよい山野草地, —VII-X-, 園芸品種がある, 柚が菊あるいは柚香菊の意。

230. *Erigeron annuus* (Linn.) Pers. ヒメジョン, ヤナギバヒメギク

A・B・D・F, 北米原産, 明治初年(1865年ごろ)渡来, 常化植物, 荒地・路傍にもっとも普通に群生, —VII-X-, 姫女苑の意。

231. *E. bonariensis* Linn. アレチノギキ 野塘蒿

A (細あとに大群落)・F, 南米原産, 明治中ごろ(1890年ごろ)渡来, 常化植物, 世界に広く分布, 雜草として荒地・路傍に大群生, —VII-X-, 荒地の野菊の意。

232. *Aster scaber* Thunb. シラヤマギキ

E・F, 北海道・本州・九州, 朝鮮・満州・中国, 山地・原野の林内に生える, —VII-X-, 若苗をムコナといって食用。

233. *A. ageratoides* Turcz. var. *ovatus* (Franch. et Savat.) Nakai ノコンギク

A・C, 本州・四国・九州, 東南からインド, 山地丘陵地に最も普通, 変化が多く栽培品もある, —VII-X-, 野にある紺絣の意。

234. *A. tripolium* Linn. ウラギク・ハマシオン

C (極く少ない), 北海道・本州・四国・九州, 朝鮮・中国(北部)・満州・東シベリア・樺太・北米・ヨーロッパ, 海岸や内陸の塩性地の湿地に生える, —VII-X-XI-, 滅失, 沢紫苑の意で, 海岸に生えるによる。

235. *Petasites japonicus* (Sieb. et Zucc.) Maxim. フキ

B・D, 本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・中国・樺太・千島(中・南部), 山地・丘陵地に生える。また蔬菜として栽培, —IV-V-, 葉柄・若い花茎(フキノトウ)は食用や薬, 雄雌異株。

236. *Artemisia japonica* Thunb. オトコヨモギ 牡蒿

A・E・F, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・満州・中国・フィリピン, 日当りよい丘陵地や山地に普通, 葉形に変化が多い, —VII-XI-, 雄のヨモギ, 種子が小さく種子がないものと思い牡と名づけたといわれる。

237. *A. princeps* Pampan. ヨモギ, カズザキヨモギ 艾

A・B・C・D・E・F (大群落), 本州・四国・九州・小笠原, 朝鮮, 荒地や低地に群生, -IX-X-, 春新苗を採り草餅の材料, 葉の下面の毛でモグサを作り民間薬 (お灸) として効果が大きい。太いものは杖を作る。

238. *Siegesbeckia pubescens* (Makino) Makino メナモミ

A・B・D (点在), 北海道・本州・四国・九州・朝鮮・満州・中国, 荒地に普通, -IX-X-, メは雌の意でオナモミの雄に対する語, ナモミはナズムの意で, ナゴミさらにナモミと転化, 粘液のある縫包がすぐついて困りはてるによる。果実が他の物に付着して散布される。

239. *Bidens frondosa* Linn. アメリカセンダングサ, セイタカタウコギ 紫茎鬼針草

A・C, 北米原産, 各地の低湿地や道ばたに群生, 燥化植物, -IX-X-, アメリカのセンゲン (センダン科植物) の葉に似た草の意, 背高田五加木で丈の高いタウコギ (キク科) の意。

240. *Cirsium nipponicum* (Maxim.) Makino ナンブアザミ

A・B・D, 本州 (中部以北), 山地・原野に群生, VII-X-, 南部地方 (岩手県) 産の山薺の意。

241. *Picris hieracioides* Linn. var. *glabrescens* (Regel) Ohwi コウゾリナ 毛蓮菜 (慣用)

A・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 樹木, 丘陵地・原野に普通, 変化が多い, -V-X-, カミソリ葉の意で, 茎や葉の剛毛が人の皮膚にふれ引っかかるのを剃刀に見立てた。

242. *Helianthus tuberosus* Linn. キクイモ

A, 北米原産, 各地に野生化, または品種が多く栽培, -VII-X-, 鬼茎は果糖の原料, 味はまずい, イヌリンを多量に含む, 花は觀賞用。菊芋の意で, キクのような花で地下に芋ができる。

243. *Lactuca indica* Linn. var. *lacinata* (O. Kuntze) Hara アキノノゲシ 山萐萐

A・B・D, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・台湾, 低地草原, -IX-XI-, ノゲシに似て秋開く花。

244. *Sonchus oleraceus* Linn. ノゲシ, ハルノノゲシ, ケシアザミ 苦菜・漬苦菜

C, 北海道・本州・四国・九州・琉球, 朝鮮・樹木・歐亜大陸, 北米に帰化, いたる所の路傍や荒地, V-VII-, アザミに似ているが刺がなく柔かい, 幼苗を食用。

245. *Youngia denticulata* (Houtt.) Kitam. ヤクシソウ

A・D・E・F, 北海道・本州・四国・九州, 日当たりよい山地に普通, -IX-XI-, 晩秋の野を飾る黄色花の野草, 菜師草の意。

む　　す　　び

(1) 史跡「大木開貝塚」環境整備事業にかかる試掘調査の一環として、当地域内の現生植物を調査する第一次実施事項として、1. 基本調査（昭和48・49年度）と2. 精密調査（昭和49・50年度）によって植生状況と植物相を明らかにすることとし、その第一歩として、昭和48年度中に実施した結果をもとに、植生状況と所産植物目録を中心に整理した。

(2) 植生の状況については、A：台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区） B：スギ・クロマツ・落葉広葉林地区 C：低地・湿地・沼沢地区 D：竹林・落葉広葉林、同伐採地区 E：アカマツ・ナラ林、同伐採地区 F：西斜面旧耕作地区 G：西側断崖地区の7地区に分け、各地区の植生状況を写真（付録1）、図1～23）と植生地図（付録2）で示した。

(3) 植物相については、今まで確認した73科245種類の所産植物目録を編み、その活用を考慮して、学名・和名・漢名、分布（当地域内・国内・国外）、植生状況・花期、利用・その他必要事項を併記した。

この調査報告は、いずれも未完成の域を出でないが、これから調査の進行とともにあって、逐次完全なものにしたい。ついてはご指導ご鞭撻を切にお願いいたしたい。

3. 付 錄

(1) 植生写真<図版 1～8 (図 1～23)>

(2) 植生地図<図版 9>

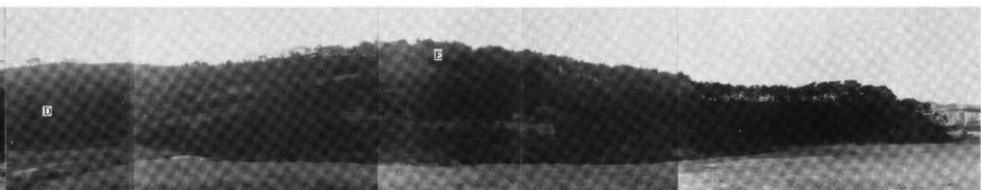
(1) 植生写真

図版 1

1 史跡「大木田貝塚」を北方および西方より望む（昭和48. 11. 4撮影）



2 史跡「大木田貝塚」を東方より望む
(昭和49. 11. 20撮影)



- A : 台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）
- B : スギ・アカマツ・落葉広葉樹林地区
- C : 低地・湿地・沼沢地区
- D : 竹林・落葉広葉樹林、同伐採地区
- E : アカマツ・ナラ林、同伐採地区
- F : 西斜面旧耕作地地区
- G : 西側断崖地区

図版 2 A : 台地上旧耕作地区（主として貝塚分布地区）



3 中央通路より東方スギ林に向って
通路にアレチノギク・ヨモギが大群生。ス
ギ林の近くにはススキ・ケズが大量現。
（昭和48.9.1 撮影）



4 中央通路上から北方クロマツを望む
通路はカゼクサ群生。両側の細路はアレ
チノギク・ヨモギ大群生。コウゾリナ・ヤ
クレソウが点在。 （昭和48.9.15 撮影）



5 中央通路より西北細路、進新市街を望む
ノコンギク・ヨモギ・アレチノギク群生。
ススキも広く群生。 （昭和48.6.29 撮影）

図版 3 B : スギ・クロマツ・落葉広葉樹林地区



6 東側よりB地区南部を望む
スギ林(植林 年令25~50年)。コナラ・ク
リ・ウツミヅザクラ・エゴノキ・ヤマザク
ラ・ホウノキなどの落葉広葉樹林。手前に
ススキが群生。
(昭和49.1.20 撮影)



7 東側よりB地区中央部を望む
スギ林にはさまれた落葉広葉樹林に、ケズ
が大繁茂し樹冠を覆う。手前はススキの群
生。
(昭和48.8.20 撮影)



8 北側よりB地区北部を望む
右端奥はスギ林。周辺部は落葉広葉樹林。
ケズが樹冠を覆う。手前はC地区の低地畠
跡。
(昭和48.8.20 撮影)

図版 4 C : 低地・湿地・沼沢地区



9 北方埋立地よりの池区を望む
右手奥スギ林、竹林。旧橋脚の低地、ガマ
の群生する湿地。手前がマコモ・ヨシの群
生する沼沢地とともに旧水田跡である。

(昭和48. 1. 20 撮影)

10 竹林の下、湿地の上にある溝處
とか所のうち北側のもの。(ソゾバ・セリ
群生。) (昭和48. 9. 16 撮影)



11 旧水田跡の湿地
ガマ・セリ・サンカクイ・フトイ・ミズビ
エ・ミヅソバ・アブラガヤ・マコモ・ヨシ
など群生。 (昭和48. 9. 1 撮影)



図版 5 D : 竹林・落葉広葉樹林、同伐採地区



12 竹林および湿地を望む
マダケの竹林で、ノブドウ・アケビ・クズ
カナムグラ・カラハナツクなどの蔓性植物
が著しい。湿地にはザマ・コガマが群生。
(昭和48. 8. 20 撮影)

13 広葉樹林および沿沢地を望む

コナラ・クリ・ナラガシワ・ウツミズザク
ラ・ヤマザクラ・オオバクロモジ・ホウノ
キ・エゾノキなどの落葉広葉樹にスギが混
生。手前の旧水田跡沼地にはマコモ・ヨ
シが群生。(昭和48. 1. 20 撮影)



14 広葉樹林伐採地を右側より望む
旧畠跡で、ヨモギ・ススキが群生。クズが
大型化。ガマズミ・クワ・ウツギ・スルグ・
バッコケナギ・キツネヤナギなどが開闢に
生える。(昭和48. 9. 16 撮影)



図版 6 E : アカマツ・ナラ林、同伐採地区



15 東側壁立地より西方に向って

極灰岩の上にはアカマツ林。周辺にコナラ、
ナラガシワ・クリ・カレツ・ガマズミ・ヤ
マウルシなどの落葉広葉樹が繁茂。

(昭和48. 1. 20 撮影)

16 中央測線北部、アカマツ林西側

アカマツの伐採された向陽地には、ナラガ
シワ・コナラ・クリ・ガマズミ・ヤマハギ
などが繁茂。アズマザサやススキが群生。

(昭和48. 9. 10 撮影)



17 中央測線西側伐採地

ススキやアズマザサが大群生。場所によっ
てワラビ・クズが繁茂。

(昭和48. 10. 6 撮影)



図版 7 F : 西斜面旧耕作地区



18 西斜面旧耕作地の中央部付近を台地上より望む
耕作地跡にはヨモギやススキが繁茂。斜面にはクワ・マルデ・クルミ・ニワトコ・タラノキなどが生える。

(昭和48. 9. 1 撮影)

19 西斜面旧耕作地の北部付近を台地上より望む

留心

手前は良木試験地跡、斜面にはススキ・ヨモギが繁茂。斜面にはクルミ・マルデ・ケヤキ・クワ・キリなど。前方のスギ林は民有地。

(昭和48. 9. 1 撮影)



20 西斜面旧耕地を下方より望む
段々畠の脇にはクワ・マルデ・タラノキ・ニワトコなどの木本が、ススキやクズが群生。

(昭和48. 10. 6 撮影)



図版 8 G : 西側断崖地区



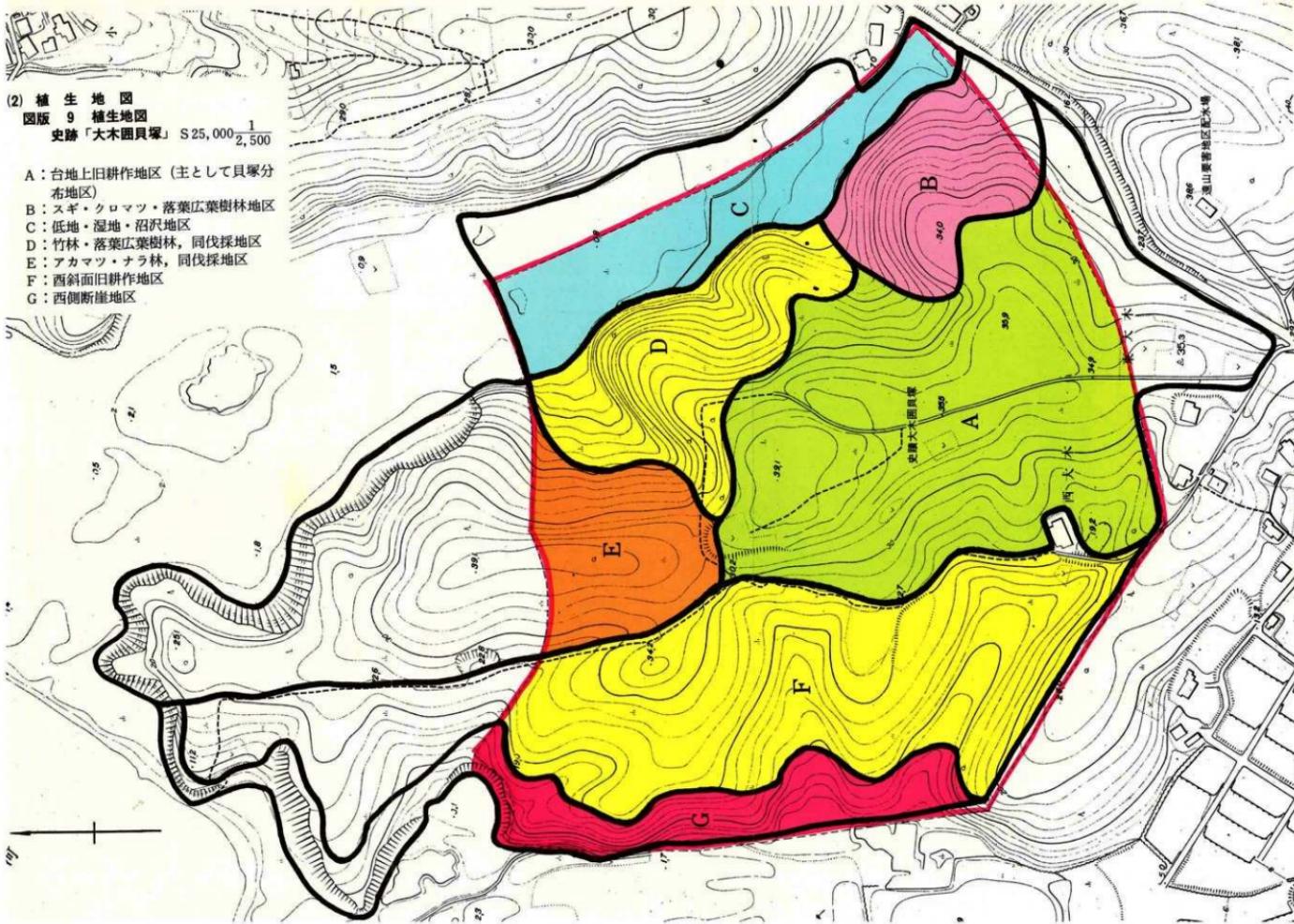
21 西側断崖地区を上方に向って望む
断崖の上部斜面にはキリ・マルデ・クラノキ・
クルミ・クワなどがみられ。スキ・マル
バハギ・ナフシロイチゴ。その上をクズが
覆う。
(昭和48. 10. 6 撮影)

22 西側断崖地区を上方に向って
ケヤキ・マルデ、スキやクズの繁茂が著
しい。ドクツブギが散生。
(昭和48. 10. 6 撮影)



23 西側断崖のクズの繁茂状況
木本の少ない内斜面にはスキとともにク
ズが大繁茂。
(昭和48. 9. 16 撮影)





七ヶ浜町文化財調査報告書第2集
史跡「大木圓貝塚」環境整備調査報告書II

昭和49年3月20日印刷

昭和49年3月31日発行

発行 七ヶ浜町教育委員会
宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市立町24-24 電話256466
